

一超直入  
如來地

川中島合  
戦

上杉謙信

宇宙の第  
一義

青年と禪

一八〇

由來禪は一超直入如來地てふ主義で、慕直に敵の牙營に突進して大將を生擒するのである、虎穴に入つて虎兒を手捕りにする活作用を爲す流儀である、言ひ換へれば直ちに大悟界に到達するのである、例へば彼の川中島の合戦の時の如き旗鼓堂々甲越兩陣相對峙したるとき、彼れ越軍の大將上杉謙信がだ、一騎驀進して敵の牙營に突進し信玄目がけて小豆長光の一刀を振かざし眞額微塵と斬り付けたるが如き、非常の大意志、大勇猛心、大機根がなければ到底不可能の事である、是と同じく、苟も禪によつて單刀直入、宇宙第一義の本陣に到達し眞如大王を捕へやうとするものも、斯の如き大意志、大勇猛心、大機根がなければ不可能である、よしかゝる大意志大猛

謙信信玄  
を取り逃  
した

古今の名  
僧知識

無殘の最  
後

心、大機根があつても脚實地を踏みて充分の戦闘準備がなかつたならば折角斬付けんとした大王を取り逃すやうなことがある、所謂彼の謙信が折角信玄に斬付けたと思ふたが遂に取逃して仕舞つて

遺憾なり十年一劍を磨し

流星光底長蛇を逸す

と憤慨するやうな事がある、されば禪の第一義に至つてはながく容易に諦達し得らるゝものでない、宜なるかな古往今來名僧知識と稱され、宗師碩徳と云はるゝものにして、生涯是の第一義の牙營に突進することもできぬで、中途にして無殘の最後を遂ぐるもの幾百人あつたか知れぬ、中には戰場へ顔出したばかりで、イザとなると

弱卒

誠 佛陀の訓

四十八手は逃げるが二の手と卑怯にも臆病神に誘はれて敵に背を見せて逃げ出すものもあつた、また名もなき雑兵の手にかゝつて惨殺さるゝ弱卒は無量無數であらう、然り現代の參禪者と稱するもの、イヤサ師家分上の老々大々たる御知識さまも、其の多くは皆其本陣に切込まぬで、途中の雑兵の爲めに殺害される木葉武者ばかりであらう、嗚呼勇將の下に弱卒なしたが、可惜許、今や一箇半箇の勇將は鐵の草鞋を踏破するも得られぬ、噫々、佛陀は斯の道の得がたく、眞理研究の難事なることを論じて、次の如く教へられた、

夫れ道の爲にする者は、譬へば一人萬人と戦が如し、鎧を桂て門を出で、意或は怯弱にして、或は半路にし

木葉武者

て退き、或は格闘して死し、或は勝を得て還る、沙門の學道も應に其心を堅持し精進勇銳前境を畏れず、衆魔を破滅し、而して道果を得べし、(四十二章經)

訓 佛陀の遠

と、諸君、應に其心を堅持し、而して精進勇銳にして假令千百の魔軍來るも一撃破滅して、速かに本陣に切込んで眞理の大將を生擒せよ、佛陀又諭して曰ふ

汝等勤めて精進すれば、則ち事として難きものなし、このゆゑに汝等勤めて精進すべし、譬へば、小水の常に流れて則ち能く石を穿つが如し、

と、彼の朱子の精神一到何事か成らざらんと同意である、如上の説話によりて諸子は、佛教は決して退歩主義でない、殊に禪に於ては百尺竿頭に歩を進めしむるの大勇

猛心を鍛錬するの試金石であることを了解せられたであらう、參禪は決して風流人のナグサミで行るのではない、厭世家の慰安所ではない、富豪紳士の隠居仕事ではない、宜しくこれ赤手蒼龍窟に入つて驪龍領下の珠を採る底の具眼の衲僧、活快男子を養成するのである、

長壽の法

第八章 長壽の法

孔子の語

壽命ながかれとは誰れも願ふところである、生死を明らめた禪者でも長命を欲しないものはない、孔子は朝に道<sup>○</sup>を<sup>○</sup>聞<sup>○</sup>て<sup>○</sup>夕<sup>○</sup>に<sup>○</sup>死<sup>○</sup>す<sup>○</sup>と<sup>○</sup>も<sup>○</sup>可<sup>○</sup>なり<sup>○</sup>と<sup>○</sup>云<sup>○</sup>は<sup>○</sup>れ<sup>○</sup>た<sup>○</sup>が<sup>○</sup>、其は求道の難きを云はれたのであつて其の實短命を欲しられたのではない、顔回は賢明であつたけれども不幸短命にして死

養老金

速成に大  
事なし

すと慨嘆せられた、して見ると人誰れか長命を欲せざらんやだ、若し國家社會の上から云へば時に或は何事も爲すことなしでたゞ米喰ふ虫となつて長命されては國家社會の場ふさぎとなつて困るから早く彼世へ退去したならばよからうと云ふ場合もあるであらうが、幸ひにして我邦にては上に聖明なる陛下の臨御まします爲めに老年には養老金を下賜して保護したまへることである、ソハ兎も角、吾人如何に大勇猛心あつて一世の大事業を成功せんとするも第一身體虚弱で短命では到底不可能である、諸子見たまへ凡そ東西古今の歴史に徴するも一代の大事業をなして成功したるものに短命なるものはないではないか、ソハ如何となれば、速成は大事を成さぬからであ

生理的見  
地心理的見

根堅から  
ざるの樹  
は長大な  
らず

る、苟くも大事を成すには、第一健全なる體軀を要する  
のである、健全なる體軀には健全なる精神宿る、強堅な  
る意志は強堅なる體内に宿るで、否、若し禪の見から云  
ふならば強堅なる意志が強堅なる身體を作り、健全なる  
精神が健全なる體軀を作ると、これ彼れは生理的見地よ  
り云ひ、此は心理的見地より云ふのである、今はソナ  
學術的話は止して、専ら禪の方面から身心の關係を調  
べて見てそして禪宗で如何に長壽の法を授けて居るかを  
話すことにする、斯く云ふと人或は言はん、刻下菁々我々  
たる青年の内から長壽法など老人メキた話しは不必要で  
はないかと、しかしながら青年諸子よ、根堅からざれば  
樹長大にならないではないか、長壽の法は決して老ぼれ

身心調和  
の術

てからなしたとて賊過後の張弓で既に遅い、所謂菁々  
我々たる時分より能く注意し培養し、將た害蟲を驅除も  
し而して將來の長大を期するのである、諸子も若し長壽  
を欲するなれば少壯の時より能く衛生に注意し、精神を  
爽快にして、徐々として長壽の準備をなしつゝ進まんけ  
ればならぬ、でこれより禪的長壽法の準備として身心調  
和の術を少しく話さうと思ふのである、

一 身心調和の術 (白隱禪師の内觀法)

身と心とは不離不即の關係を有つて居ることは西洋の  
心理學も説いて居るが佛教でも説く、殊に禪に於て長壽  
法は言ふまでもなく、最高の理想たる大悟界に進むにも

道元禪師  
身心調御  
法

身と心とは能く調和せんければならぬ、而して身と心との調和を得るには養氣和心が肝要である、乃で其の方法として禪宗にて坐禪をするのである、道元禪師が其坐禪儀の中にこの身心調御の法として坐禪の要術として教へて、

正身端坐して、左に側ち、右に傾き、前に躬まり、後に仰ぐことを得ざれ、耳と肩と對し、鼻と臍と對せしめんことを要す、舌は上の顎に掛けて、唇齒相着け、目は須らく常に開くべく、鼻息微かに通じ、身相既に調へて、欠氣一息し、右右搖振し、兀々として坐定して、箇の不思議底を思量せよ、不思議底、如何か思量せん、非思量、此れ乃ち坐禪の要術なり、

身は心の  
城廓

白幽真人

と、これ即ち身心調和の法である、始めに身相を調へ而して後に心想事成に及ぶのである、如何となれば吾人の身體は心の城廓の如きものである、城廓調はぬければ心王安ずることができぬ、又身體は盪の如きもので心は水の如きものである、心水の靜止清澄を得るには器物は平處に安じて搖振せぬやうにせんければならぬ、斯く城廓堅固に器物安全となつて、そして始めて心清淨安靜なることを得る、斯くして身心調和するときには健全なる身となり健全なる精神となりて、長壽を得るやうになるのである、白隱禪師はこれを内觀法と云ふて禪師は此法を自幽真人から授かつたと云はれてある、白幽真人とは何人であるか、所謂る仙術を修したるものであらう、内觀法の詳細

は禪師の書れた夜船閑話に云ふてある、今其大要を摘載する、

總じて一切の修行者、精進工夫の間に於て、心持悪しく侍れば動靜の二境に障へられ、昏散の二邊に隔てられ、心火逆上して肺金痛み碎け、元氣損して難治の病症を發するも間々多き事に侍り、又内觀の眞修によつて、能く修練致し侍れば至極養生の秘訣に契つて、心身堅剛に、氣力丈夫にして、萬事輕快に法成就に至ること候、去る程に大覺調御の阿含部に於て、右の趣きを委しく教諭これあり、天台智者大師も其の大意を汲みて摩訶止觀の中に叮嚀に示し置かれ侍り、書中の大意は、縦へ何分の聖教を披覽し、何分の法理を觀

心氣を氣  
海丹田に  
收む  
臍下  
丹田然  
たる如し

察し、或は長坐不臥し、或は六時行道すといへども、常に心氣をして臍輪、氣海、丹田、腰脚の間に充たしめ云々  
元氣自然に丹田の間に充實して、臍下瓠然たること、未だ篠打せざる鞠の如し、若し人養ひ得て斯くの如くなるときは、終日坐して會て飽かず、終日誦して會て倦まず、終日書して會て困せず、終日説いて會て屈せず、縦ひ日々に萬善を行すといへども、終に怠惰の色なく、心量次第に寛大にして、氣力常に勇壯なり、苦熱煩暑の夏の日も扇せず汗せず、玄冬素雪の冬の夜も機せず爐せず、世壽百歳を閱すといへども、齒牙轉た堅剛たり、怠らざれば長壽を得、若しそれ果してかく

の如くならば、何れの道か成せざる、何れの戒か持たざる、何れの徳か充たざらん、若し又如上の故實に達せず、真修の秘訣を諳せず、妄りに自分悟解了知を求めて観理度にすぎ、思念節を失するときは、胸膈否塞し、心火高ふり上り、兩脚氷雪の坐に浸すが如く、雙耳谿聲の間を行くに齊ふして、肺金痛み砕け、水分枯渴して、終に難治の重症を發して、命根も亦保ち難きに至る、これたゞ真修の正路を知らざる故なり、寔に悲むべし、

と、コハたゞ長壽を得るための内觀法を通俗に説話したのである、次に内觀の真修を以て禪師は坐禪工夫に入らしめやうとして示して云ふ、

内觀眞修

己身の彌陀

本分家郷

唯返すくも内觀眞修寔に放過すべからざる至要なり、内觀の眞修とは、吾が臍輪以下丹田氣海及び腰脚足心、總てこれ趙州の無字、無字何の道理かある、吾が臍輪以下丹田氣海及び腰脚足心、總て是れ自己本來の面目、面目の鼻孔何れの處にかある、吾が此臍輪以下丹田氣海及び腰脚足心、總てこれ吾が唯心の淨土、淨土何の嚴かある、吾が此臍輪以下丹田氣海及び腰脚足心、總てこれ己身の彌陀、彌陀何の法をか説く、吾が此臍輪以下丹田氣海、及び腰脚足心、總て是れ本分の家郷、家郷何の消息かあると、咳唾、掉臂、寤時、寢時、男子たるもの、思ひ立ちたることを遂げすや置くべき、仕事果さすやあるべきと、決烈勇猛の大憤志を振つて

間もなく進み給は、平生の心意識情すべて行はれず、胸襟分外に清涼に、分外に皎潔にして、萬里の層氷裏にあるが如く、縦ひ亂軍の場に入り、歌舞遊宴の歌吹海に入るといへども、人なき處にあるが如く、雲門大師の氣宇王の如しと云ふ底の大機は求めざるに煥發せん云々

と、是はこれ萬夫に傑出する底の大丈夫兒、平生の素懷である、

次に禪師は當時の邪禪者が徒らに閑寂を事として些の活機なきを擊破して

彼の寂靜無事の處にありて、識神を認得して、見性なりと相心得、楷磨浮盡して以て足れりとする處の無眼

雲門大師の語

閑寂に偏するを破して

禿奴の族は、夢にも曾て見ることを得んや、是等の族は終日無爲を行じて終日有爲を打ち、何が故ぞ見道分明ならず、親しく法性の實際を窮めざる故に、惜むべし再び得難き一生を盲龜の空谷に入る如く鬼の棺木を守るに似て、やみ／＼と過了して、苦しかりし三途の舊里へ懲りもなく立歸らんこと、皆是れ進修の指南惡しく、見性本より真ならざるが故に、一生空しく心力を勞し盡して終に方寸の功を立つること能はず、實に憐むべし云々

と、何ぞそれ痛切ではないか、現代の老々大々たる天下の宗師、誰れか此痛棒を喫せざる、

白隠禪師は此内觀法によりて病中の工夫を發明し、こ



れを病中の公案として參禪者に、否、病者に授けたのである、

病中の工夫に、三つの用心あり、

一には、死を極むべし、

生死無常は、人間の定法、況んや道人をや、生死事大を以て、平生の受用とす、此故に病中には、先づ死を極めて、事に迷はず、身を介抱人にまかせて、安然として任すべし、

二には、息に依る、

身心疲れて、行業及ぶべからず、身風の身内に解するを覺ゆ、是を諸法實相の境として、正念相續を誠むべし、

三には、願を勵ます、

病若し治せば、益々心を改めて、行を勵まんと誓ひ、命若し盡きなば、日頃の大願の如く、大丈夫の身を受け、一聞千悟の人となりて、普く一切衆生を利益せんと、勇みて誓ふなり、穴賢

と、人はあまり病を苦にして神経をなやますと、却て重くなるものである、精神の据處によつて少々の病には打勝つものである、であるから白隱禪師は老婆心を以て病中の公案を示されたのだ、今参考の爲めに毒薬と闘つて遂に勝利を得たる實例を左に掲げる、其は卍菴和尚の事である、

卍菴和尚は曹洞門の高僧であつた、二十八歳の冬、他

人と法論をやつたが辯論風發して遂に對者を論駁した、所が對手や實に憤恨に堪へなかつた、で毒藥を以て和尚を殺害せんとしたのである、神ならぬ身の和尚は遂に此惡計に陥り知らずして毒藥の害に逢ふたのである、何にかは以てタマルべき、和尚の全身忽ち變じて紫黒色となつた、而して其苦しみは云ふべからずである、卍菴些の怒恨の色なく自ら謂らく、我れ十七歳の初發心時より正師を尋ね叢林に入り、參禪辯道すること十餘年である、其間越の長泉寺に元綱老師の下に自己を脱落せりと思ひしに、今は此毒藥に苦められて、轉處自在ならざるは何たる腑甲斐なき事ではないかと、自ら奮起して于茲大に懺悔して、而して一層の大勇猛心を發し、毒藥と闘つて

病は氣から起る

趺坐し、そして曉に及んで吐瀉一時に來つて、恰も臟腑も盡く脱落してたゞ皮膚のみ残れるかと思ふばかりであつた、斯くして劇苦は皆除去して平腹となつた、即ち死中に活を得たるのみでなく、憎愛の二見をも脱出して宛親平等を證することを得た、爾來常に參禪者に訓示して曰ふ、それ戦と云ふは彼を怖れず、これに與みせず、ただ正念工夫を押し立て、無二無三に進めば、苦痛も妄念も、皆一團の精神である、一色の辯道となるのである、と、哩諺に病は氣から起ると、あるが、實に一分の眞理を穿つて居る、サホドの重病でなくともあまり氣をもみ神經を惱ますときは却て重病となして仕舞ふのである、是れ精神治療法の起る所以である、而して禪は此精神治

療法の上々なるものである、少々の病に罹るも卍菴和尚の如く自己の意志を鞏固にして精神を不動地に住せしめて、即ち心を臍下丹田に据へて正念に工夫したならば、遂に病魔も窺ふに所なく退去して仕舞ふ、

斯く言へば人或はソハ藥の効能書の如くあまり禪の効能を書きすぎはせぬかと疑ふものがあらう、されど是れ決して賣藥者が藥の効能を書き立つる如き我田引水ではない、疑ふものは宜しく心理上科學的説明について見たならばよからう、并は予は曾て文學博士福來友吉氏の心理學講義に聽いた、で今は参考の爲に借り來つて青年諸子に示さう、

## 二 丹田に精神を凝集するの効

心を氣海丹田に凝集して以て諸縁を放捨し妄念雜量を休止して無念無想の眞域に入りて身心を安靜平和ならしむるのは禪の任務である、で今福來博士の説によつて見ると丹田に精神を集中するの効は多大なるものである、即ち左に、

第一、腦中に鬱血すると、精神朦朧として活氣を失つて仕舞ふ、そして智的作用も澁滯して、精神的精力を失ひ到底長き勉強に堪へざるやうになつて仕舞ふ、然るに丹田に精神を凝集するときは、腦中の鬱血が下行して腦髓冷靜となり、神氣爽快となるのである、

第二、腦中に鬱血するときは、内臓諸器に循環すべき血液に不足を來し、胃腸の消化運動不活潑となり、秘結消化不良等の爲め、胸腹部の塞りたるが如き、不快なる心地を生ずる等の悪結果を惹起すことになる、かゝる場合に於て、凡そ十分間程端坐して精神を丹田に凝らすのである、然るときは、秘結、治し、消化良く行はれ、精神爽快となるのである、若し此の法の實行に熟練して如何なる精神的業務に従事しつゝあるときにも、習慣的に之を行ひつゝあるやうに至る時は、學問を勉強しつゝあるやうな間にも、胃腸良く活動し、そして消化不良と云ふやうな悪結果を招くやうなことはなからう、

第三、精神興奮して妄念頻りに起る時は、血液腦中に鬱積し、手足が冷却し、爲めに安眠を妨げらる、斯る場合に於ては、端坐して精神を丹田に凝集し、靜に呼吸を數ふること五十乃至百に至るべし、然る時は精神安靜となり、性情寛厚となり、手足次第に温暖となるのである、

第四、胸中に鬱血すること長月日に亘る時は、以上に列記したるが如き弊害蓄積して終に神經衰弱症に罹る、故に常に精神を丹田に凝らすことを習慣的に實行して怠らざる時は、神經衰弱を未發に妨ぐを得るのである、又既に發したる該病を治療するに至るのである、

第五、人間には本來具有の大精神力がある、余は之を活

元と稱するものである、人の精神的生命の原動力となるものであるからである、仙家に本源の真氣と謂ひ、孟子に浩然之氣と謂ひ、白隱の非聖非凡の鈍瞶漢と謂ふもの、蓋し此のものに外ならぬのであらう、此力は本來具有なるものではあるが、種々なる妄念の爲めに蔽塞されて實現する事ができぬ、若し此力にして一旦實現すること得ざるに至つたならば、則ち人は精神氣力を失ひて、瑣細なる事にも苦悶し、心配し、驚怖し、悲哀し、常に不平多くして徒らに慷慨悲憤し、一日も平和なる日月を見る事ができないやうになる、所謂の神経衰弱家と云ふものなのである、かゝる人は常に精神を丹田に凝らして無念無想の境に入り、以て妄念

の爲めに塞がれたる活元を喚起すべし、これ人間の一生に取りて至重至大の一要素である、

と、これ實に禪宗の坐禪法の効能を科學的に解釋したのである、禪宗の坐禪には實に斯の如き大効能がある、然るに従前の禪僧等が習慣的にいや／＼ながら痛い足を我慢して無意味に曲げて坐して居れど更にかゝる効力あることを知らぬのである、しかしながら禪僧は他の宗教家よりも比較的健康なるは知らず識らずの間に其効力を被つて居るのである、或人は今の永平寺の森田悟由禪師に問ふに禪師様は敢て肉食もなさらぬやうであるに如何なる衛生法によつて貴僧の如く御健康でしかく肥滿に在らせらるゝかと、時に禪師答へらく、野禿のは別に衛生の妙

術を知るにあらず、只白粥と豆腐が何よりの好物で常食としてゐるのみだと、白粥と豆腐の滋養分あるとは醫家の定説ではあるが、しかし禪師の健全にして且つ肥満に在らるゝは少壯時代より坐堂に在つて所謂心氣を臍下丹田に收め身心調和せし効力が實現したのであらう、で古來の高僧にして少壯時分より胃病肺患などに病んだものも坐禪して全治したと云ふ例が随分ある、されば坐禪は一種の精神治療と云つても不可はなからう、最近明治の傑僧として世に知られたる原坦山老師などは其一人である、老師は壯年の時は非常に病身であつた、所が尾張八事山真人に遇ふて仙術を授かり、其より坐禪に應用して自家特得の長壽法を發明し、佛仙論を唱へ佛仙舎を設け

て門生をも洵治して居られた、師の説は惑病同源論を主張して、其を基礎として長壽法を唱道したのである、今其の大要を掲ぐる、

### 三 佛仙の法 (坦山老人の長壽法)

覺仙即ち坦山老師の長壽法は、例の佛仙法なのである、今其佛仙法の大要を掲ぐ、  
佛仙社は余の數十年精究實驗に依りて、明治十年の創設に係る、其大意は惑病の原因を解脱するにあるのちや、而して其惑病の原因と云ふものは粘纏渾濁の流動液であつて、頭腦を蔽蓋するものを名けて無明と云ふのちや、而して胸腹に集結するものを煩惱と名くる、

癡根病原

蓋し惑體は諸病の原因であつて、諸病は類體の結果である、其原因一であるから癡根と名け病原と名くるのちや、其之を解脱することはなかく、容易の業ではない、古來佛を學び仙を修するが、サテ其の實效を得る者幾許ぞや、故に是法を兼修し、實驗明確ならんことを要するちや、

第一則は集苦の結を除く、

(即ち是れ妄識の腦胸腹に積滯して、憂悲苦惱を起すもの)

集とは五蘊の原質は其始め流動體であつて、其縁の發揮に隨ひ身心を成すから、心地(腦胸腹)集結すれば憂悲苦惱を生じ、肺心胃腸等の諸病を發するのである、

集苦の結を除く

惑病の原を斷す

今其の身心の集結を除き、滯碍なからしむるの法は、禪定の力によるの外はない、禪定の力は堅確剛強でなければ効能はない、で其等の結根を除くを解脱と云ふのちや、若し頓に最も剛堅なる禪定の力を得て、無明の根本を拔去し痕跡を絶するに至つたならば即ち最勝の覺者と號し、又究竟樂地と名け、極樂世界とも名るのちや、これ唯だ圓頓大機の者の能する所ちや、

第二則、惑病の原を斷す、

(即是れ陀那の覺性に和合して一切惑病の患を成すもの)

是れは心地にあつて惑障をなし、身處に於て疾病を生ずるの本原、即ち腰脊より醸發するところの黏液(經中

阿陀識と名くるもの)を斷絶せざれば完全無缺の身心を得がたいのぢや、そして其の此を修行するところの次序は

- 腹惑病
- 胸惑病
- 腦惑病
- 背脊病
- 全身病

- 第一 腹惑病
- 第二 胸惑病
- 第三 腦惑病
- 第四 背脊病
- 第五 全身病

と是の五科の次序が大切ぢや、修行者は宜く次序を誤まらぬやうにせねばならぬぞ、大凡そ最先に集結するを根本となし、最後の者を支末とす、其次序は最後の支末より斷じて、最先の根本に溯り、惑病の根原を斷

無明の根本を抜く

じ、妄識流注を絶するに至る、

第三、則ち無明の根本を抜く、

(即ち是れ和合の識體、腦胸に蔓延して、生滅の念想を爲すもの)

無始の業縁に生じ、心地に蔓延し、念想の動搖起滅の本體(覺性の寂照不動を染濁惱動するもの)譬へば空中の煙霧、淨水の塵埃の如く、心性の淨地を汚穢するものにして、其之を拔盡淨了し、常住の極妙樂果を得るものは獨り最剛至堅の力無畏三昧あるのみぢや、

と、マーヌス云つたやうは説で大變六ヶしいやうである、今其説の概要を摘んで云へば人類すべての煩惱、又すべての病氣は無明が根本である、而して其無明とは如何な



るものかと云ふと、無明は一種の液體であつて、其液體が脊髄を逆に下る頭の方に上り、腦中に充つるのである、であるから、先づ惑病を除いて悟界に入らうとするには此の無明の液體を下して仕舞はなければならぬ、乃で其を下す順序は、第一に臍下丹田に力を入れて全身の無明を下す、第二には背脊病を下す第三は腦惑病、第四胸、第五に腹惑病と、斯ふ云ふ順序で禪定の力で此の液體を下して遂に悉皆下し切れれば于茲に始めて大仙となるのであるとの意味である、これ老師が口に言ふのみでなく佛仙社に於て學徒に行せて居つたのである、しかし老師自ら實行實驗して世に宣言して云ふに若し我説の理非を檢せんと思ふものは我最後の境界に見るに如かずと、果然

臍下丹田  
に力を入  
る

大仙

實行實驗

老師齡七十有餘年に至るも醫藥に親まず、たゞ一朝老衰病の名の下にしかも自ら死期を豫知し知人へ今日何時に死去すてふ報告書まで認めて期に至つて怕然として化したと、これ老師平生の宣言を證して餘りありと云ふべしだ、殊に予輩の諸君に紹介しやうと思ふのは、老師の惑病同原論の主義が今や米國のエッリー氏の創唱でクリスチアンサイエンスとて一の心理療法が盛んに行はれて居る、即ち一種の精神治療法と一致して居るのである、これ老師が既に四十年以前に於て實驗唱道したるは先哲末言の卓見と謂ふも不可はなからう、

今世動もすると青年の參禪もよいが、坐禪など、形式によらなくとも精神さへ湛寂と落ちついて居つたら可か

らう、古徳は行もまた禪臥も亦禪と云つて居るではないか、  
 されば歩行して居つても臥て居つても矢張り禪であらう  
 と云ふ人もあるやうに聞いたが、コハ大根大機のものな  
 らば行も亦禪臥も亦禪でよいかも知れぬが、兎も角最初  
 の中はたとへ五分間でも十分間でも坐つた方が精神が落  
 着いてよからうと思ふ、第一に正身端坐せんと臍下丹田  
 に力が入らぬ、坦山老人の定力と云ふたのは所謂正身端  
 坐して臍下丹田に入れたる力なのである、であるから青  
 年諸子は平生にても毎朝夕たとへ五分間でも十分間でも  
 宜しく静室に入つて正身端坐し、而して新鮮の空氣に向  
 ひ深呼吸して丹田に送つて力を入れ無念無想に住して見  
 たまへ其の神氣の爽快にして其身體の健全なることは受

定力

青年の坐  
禪

合である、で論より證據何より實驗するがよからう、

#### 四 元氣養成と筋力養成

山高きが故に貴からず、  
 樹あるを以て貴とす、  
 人肥たるが故に貴からず、  
 智あるを以て貴とす、

と、元氣と筋力の平衡を失するを道破したる語で世に體  
 格ばかり大きくして元氣がない、即ち氣力のなきものを  
 ウドの大木と云ふが、人が如何に體軀が發達し筋力が強  
 剛であつても貴いとはいはれぬ智識がなければ無用の場  
 塞ぎである(古へ智と云ふ中に意力即ち元氣も含まれてあ

元氣と筋  
力

實語教の  
語

ウドの大  
木

今の教育家

元氣の修養

教育の缺陷

精神と肉體

る、所が予輩つらく、現今の教育家のする所を見るに専ら智育と體育とのみに力を注いで元氣を養ふことはかけて居るやうである、運動や體操、或は遊戯などを盛んに行らせて居るが精神力即ち元氣を修養することはない、これ今日教育の缺陷であらうと思ふ、であるから運動や體操で筋力は比較的發達するも元氣即ち精神力はチツともない、これ現今の青年の薄志弱行なる所以であらうと思ふ、徒らに筋力ばかり發達し體軀ばかり長大であつても元氣缺乏するときは遂に神經衰弱して、終生快々と愉まざるものが間々あるではないか、されば人間は精神と肉體とは不離不即の關係を持つて居るものであるから、ドチラでもあまり一方にのみ偏しては害ありて利とはな

事實の證明

元氣旺盛

渾身これ元氣

らぬ、精神のみ過度に勞すれば體軀が衰弱し、體軀のみ偏すれば元氣衰ふるは當然である、であるから雙方平等に調和して行かなければならぬ、諸子見られよ、事實は何よりの證明である、日本の一小嶋にして世界の強大國と誇つて居る、露國と戦争してアノ大勝利を博したではないか、日本小也といへどもこれ元氣旺盛であるからである、露國は世界三分の一を有する大國といへども民心四離滅裂で國家の元氣が衰亡して居るから敗北したのであらう、日本人倭小なりといへども渾身これ元氣に充ちてるから一騎にして當千の活氣ある、これ我小にして彼の大に勝つたる所以である、所が日本現代の青年はこの元氣の養成をソッチのけにして、或るものはたゞ筋力の養

成に奔走し、或ものは唯々本能性の發揮に狂奔し、ニキビ文學、星菫文學等にウツ、を抜かし居るやうな傾向があるに至つては、國家の爲め社會の爲め痛歎せざるを得んやだ、是に於いて予輩は現代の青年諸子に參禪を行はせたくなる、禪は所謂る身心調和の術を以て宇宙の第一義と冥合し、自己大精神力、即ち元氣を養成する鍛錬所である、されど諸君決して學業を放擲し、家業を廢して鎌倉へ行つて禪堂に隱坐して線香の匂を嗅いで趙州の無無とキバツて居るやうな參禪はおすゝめ申さぬ、予輩の諸子と共に參じやうとする禪はかねゝも申す如くツンな形式に束縛される禪ではない、所謂る行住坐臥皆是れ禪の主義である、若しそれ形式を方便として初學者に

元氣養成所

曉天坐

布團中の坐禪

夕座

用るならば予は諸君に朝夕の二時に坐したならばよからうと思ふ、即ち

毎朝……曉天(午前五時頃)團中より出でたるとき一時間正身にして端坐し新鮮の空氣を吸ひ以て臍下丹田に收むべし、而して無念無想の境に入るべし、若し起きて端坐し能はざるときは、布團の中にあつて身を真直に伸ばし、兩手も齊しく伸ばし、丹田より足の指頭に力を入れ深呼吸すること凡そ三十回、而して安詳として徐ろに起るもよし、

毎夕……午後十時頃都て二日の業務了つた上に即ち寢に就く前に於て諸縁を放却し萬事を休息して安靜一時間端坐すべし、若し止むことを得ざる事故の爲め

偉人の言行格言

永嘉大師の語

坐すことのできぬ場合は、矢張り朝の如く布團の中にあつて行るも妨げない、而して修養としては敢て古則公案や祖録などの七面倒なものに頭を費すよりも偉人の言行若しくは格言等を業務の餘暇を以て黙讀して以て自己精神の修養とすべし、

と、以上は形式の一端に止るものではあるが、専門家ならざる青年諸子には是丈にても充分である、若し毎朝夕怠りなく實行するならば、時に物好きに鎌倉の禪堂に隠れて壹週間や二週間坐つて來るよりも餘程ましである、さて不斷精神を此方面に注いで居るならば遂には所謂永嘉大師の謂はれたところの行も亦禪、臥も亦禪、語默動靜、體安然てふ境界に到らるゝのである、

### 五 心の主たれ心の使たる莫れ

心の主たれ心の使たる莫れ  
 心の主たれ心の使たる莫れ  
 心の主たれ心の使たる莫れ

心は好書師の如し（華嚴經）と佛陀が教へられた、即ち心は書師のやうなもので種々のものを畫く、佛もかけば鬼も書く、神も菩薩も乃至森羅萬象何でも皆な心の書師が書くのである、であるから諸子苟くも活氣ある青年、元氣あるの青年たるものはかゝる書師のやうな心に驅使せられてはいかぬ、宜しく書師のやうな心の主人となつて彼れを自由自在に使役せぬければならぬ、即ち現今の學術語を以て言はゞ

智○識○の○爲○め○に○使○役○せ○ら○れ○す  
 智○識○の○主○となつて使役せよ

智識の主人公

哩諺

智識の食傷

星董智識主義理想に逐はれ

となるのである、今の青年諸子は多くは智識に使役せられて、智識を使役する力が缺けて居るやうである、即ち智識の主人公となる氣力はなく、智識の奴隷となつて居るのである、智識の奴隷となり、智識力に使役せらるゝとは如何なることであるかと云ふに、諸子があまり智識が豊富な爲めに種々の妄想が起つて爲めに煩悶懊惱するのではないか、知らぬが佛と云ふ哩諺があるがあまり諸子が物知りすぎてアレやコレやと氣迷ひして苦しみつゝあるのではないか、これ即ち澤山の智識を詰め込みて遂に其を消化することができぬで食傷を病むで居るのであらう、或者は星や董の智識に驅役せられ、或者は主義や理想の爲めに逐ひまはされ、己れが期待せる希望に適し

智識に殺害され心に賊せらる

般若の眞智慧の眞智向上の大

ないからとて自ら煩悶懊惱して、遂に巖頭の感をやるものあり、鐵道往生をやるものもある、これ智識の爲めに殺害せられたのである、心の爲めに其の身を賊されたのである、さればと云ふて智識其ものは決して悪しきものではない、心其ものは決して悪しきものではない、たゞ其智識、其心の主人公となりて能く適當に彼れ等を使役する精神力、(意志力、或は元氣)がないからである、若し此等の精神力あるものは其得る所の智識を縦横無碍自由自在に應用活現するのである、禪にはこれを般若の眞智慧と云ひ、又向上の大智とも云ふ、予は現今の青年諸子は技巧的小刀細工的智識欲に汲々として、八風不動の大活氣なきを恨むものである、

自重自尊心

### 第九章 自重自尊心

自重心と成功

#### 一 自重心と成功

自己發展

福澤諭吉  
尊翁獨立自

自ら勞し  
自ら食ふ

人に自重自尊の心がなければ何事も成功せぬ、否、自己の發展を期することは不可能である、福澤諭吉翁はこれを獨立自尊と云ふて居るが、彼れ物質主義、公利主義の人でも晩年に至つては人に獨立自尊の精神なければ自己の發展を見ることはできぬ、國家に獨立自尊の精神なければ國家の發展を見ることは不可能である、とその着眼かできたのであらう、乃で福澤翁は云ふ、

「自ら勞して自ら食ふは人生獨立の本原なり」

禪語

陸象山

自立自重

塊を逐ふ  
狂犬  
瞎漢

人格本位

釋迦何人  
ぞ我何人

と、禪語にはこれを「他の鼻孔を借らず」と云ふてある、支那の陸象山は「自立自重、人の脚跟に随つて人の言語を學ぶべからず」と云ふて居る、而して禪には自重自尊の精神なくして徒らに人の脚跟に随つて人の口頭につくものを呵して塊を逐ふ狂犬と云ひ、他の語脈裏に轉却せらるゝ瞎漢と云つてゐる、

由來禪は前に云ふ如く他の佛教とは違ひ、人本位であるから人格を尊び、自力自信を以て自己の發展を主義とするの宗旨である、即ち釋迦何人ぞ我れ何人ぞ、彼れにあつても眼横鼻直、我にあつても眼横鼻直と云ふ自尊心

不義無道の門に寄らぬ、道元禪師の頼絶し

圓點々々、掉尾ベコ、快川國師

を有つて居る、故に古來眞の禪僧は貴顯に媚び、權門に諂ふやうなことはない、如何なる權貴王侯より招かるゝも不義無道の門には立寄らぬ、卓然として宗教家の品位を保つて居る、彼の道元禪師が北條時頼が切りに東下して禪要を請益(教化)せよと懇請す、時に禪師侍人に對して云はるゝは、  
若し佛法に志しあらば、山川江海を涉りても來り學ぶべきなり。

と云つて遂に其時には行かれなかつたと云ふ、末世の僧侶が徒らに私腹を肥す爲めに佛を賣り法を賣りて、他の歎心を買ふて圓點々々、掉尾ベコゝたるものとは零壞の差である、又彼れ武田信玄の歸依僧であつた快川國師

慧林寺

武田勝頼

織田信長

信長慧林寺を焼く

の如きは所謂獨立自尊の爲めに斷々乎として信長の請に應せず遂に焼殺の慘劇に遭ふた人であつた、國師は甲斐國慧林寺の住僧で厚く武田信玄の歸依を得て居つた、所が運拙くて武田家も勝頼の代に至つて遂に信長の爲めに亡ぼさるゝに至つたのである、國師は當代の高僧であつた、で信長招請して法要を請問せんとした、けれども國師は二君に見えざるの高節を持ち、儼然として信長の招に應じない、乃で彼れ短辯なる信長は猶豫もあらばこそ、無殘にも國師始め山内の衆僧も山門樓上に追ひ上げ下に薪木を積んで火を放つて焼き拂つた、(或は謂ふ敵を隠匿した意趣とも云ふ)されど國師は自ら隨徒を率ひて山門樓上に端坐して動せず、燄々たる猛火は紅の



快川國師  
火定に轉入  
する一轉語

舌を捲きて今や一なめにせんとする勢で迫つて來るにも  
かゝはらず、泰然自若として神色變せず、乃で國師衆徒  
に向つて各々一點語を命じて自ら云ふ

安禪は必ずしも山水を須ひず、

心頭を滅却すれば火も自ら涼し、

と喝破して遂に火定に入つたのである、これ如何に悟道  
家だと云ふても、水は冷で火は熱いことは凡人にも變ら  
ない、がしかしこゝが所謂大精神力即ち元氣の剛堅なる  
ところである、この剛堅なる元氣あつてこそかゝる場合  
に於て自重自尊の品位を保つことができたのである、否、  
禪僧でなくとも古來の英雄豪傑偉人潔士は皆此自重自尊  
の獨立心を以て自己を發展し來つたのである、古の武士

新井白石  
の自重心

山崎闇齋  
の自重心

井上侯

が二君に事へすと云ふのも、貞女が兩夫に見えずと云ふ  
も皆この元氣よりして發したる嘉言である、彼れ新井白  
石が一介の貧書生たる時は或家に書を借りて讀むの便を  
得て寄食し居つて、遂に家人に人物の凡ならざるを見て  
取られ婚談を申込まれた、時に白石儼然拒絕して云ふ、  
我れ書を讀まんが爲めに于茲在る、大丈夫何ぞ鄙夫の女  
を娶らんやと、

又彼の山崎闇齋の如きもなか／＼自重心が強かつた人  
であつた、初めて江戸へ出て來て或る書肆の隣家に賃居  
して、頻りに其書を借覽して居つた、或時書商が井上侯  
(信濃守か)の所へ注文の書を齎して參候した、時に井上  
侯書商に向つて云はるゝは、汝の知る者に人の師となる

徂徠の自  
尊心の自

道を問は  
んと欲せば  
先づ來り  
見よ

べきものはないか、若しあつたならば寡人に紹介せよ、商  
山崎闇齋の事を以て答へ近日同道して御紹介仕らんと云  
ひて退き欣々然として事を闇齋に告ぐると大に喜ぶであ  
らうと思ひしに、曷ぞ知らん箇の一介の貧儒生、些の喜  
色なく、却て不足がましき顔色にて毅然として書商に向  
つて云ふ、井上侯が若し眞に道を問はんと欲したならば  
則ち先づ來り見よと、書商呆然として去つたと云ふこと  
である、これ即ち道の爲めには王侯にも屈せぬと云ふ自  
重自尊の精神である、苟くも師位に立つて教を人に施さ  
んとするものは斯くの如き獨立自尊の精神がなければな  
らぬ、師嚴にして其道尊しと云ふ古訓にもある、  
荻生徂徠が歿するに臨みて、天大に雪を降らした、徂

海内第一  
流の人

徂人に謂つて曰ふ、海内第一流の人、物茂卿將に命を  
隕さんとす、天爲めに此の世界をして銀ならしむ、  
と、何んぞそれ豪快ではないか、男子苟くも此大意氣な  
くして可ならんやである、今時の人の如く、學問を以て  
官に身を賣り會社に身を賣り、學校に身を賣り、甚だし  
きは學問の時間切賣りまでするやうになつては學問の獨  
立否自分の獨立もできない、斯る状態にありて徒らに師  
道の衰頹を云々するは野暮の骨頂である、しかしこれも  
食ふ爲めだと言ふなら止むことを得んが、併し喰ふこと  
ならば禽獸でもやつてる、されば苟くも豎に歩いて人間  
であると自稱するからには喰ふ以外に或一物がなければ  
ならぬ、此或物がなければ人獸の別はなからう、吾人此

一物を失却せぬやうに有りたいて諸子に此自重自尊の心を保たれんことを希望するのである、諸君服膺せよ、自ら立つものは強してふ格言を

格言

自信力

## 二 自信力

格言

自信は大人となるの一要件なり

この格言の如く、苟くも獨立自尊の大人となることは自信力がなければ不可能である、故に予輩は茲に自信力は自重自尊の一要件として諸君に推奨せんと欲するのである、又自信力はこれ成功の基礎であるてふことも知つて貰ひたいのである、佛陀は華嚴經に  
信は道の元功徳の母たり、一切諸の善法を増長す

佛陀の訓言

ニュートン  
ガリレオ  
コロンブス

基督

釋迦

孔子

と、示してある、凡そ事大小となく如何なる事業、否、學生諸子が學術研究をするにしても、哲學者が眞理の研究するにしても、自信を基礎としてやらぬければ到底堂へに上るとは不可能である、彼れニュートンやガリレオが引力の眞理を發見するのも、コロンブスが亞米利加發見の大事業を企圖するのも此自信力がなかつたならば成功しなかつたであらう、基督も我れはこれ神子なりてふ自信力がなかつたならば、後世の感化は是れほどに至らぬであらう、釋迦若し天上天下唯我獨尊の自信力でなかつたならば東亞五億の蒼生に感化を與へられなかつたであらう、孔子が若し天徳を予に生せり、桓魋其れ子を如何てふ自信力が無つたならば、東亞二千有餘年の道徳を扶植し得な

自信は自  
己を大に

道元禪師  
の訓言

かつたであらう、實に自信は自己を高大にするの一要素である、自信は實に偉大なる人格を産むの母である、道元禪師が自己を重すべく、自己の尊ぶべき自信力を自覺せしめんが爲めに諭示してある、曰く、

我○等○が○行○持○に○よ○り○て○諸○佛○の○行○持○現○成○し○、○諸○佛○の○大○道○通○  
達○す○る○な○り○、○然○あ○れ○ば○則○ち○一○日○の○行○持○是○れ○諸○佛○の○種○子○  
な○り○、○諸○佛○の○行○持○な○り○、○謂○る○諸○佛○と○は○釋○迦○牟○尼○佛○な○り○、  
釋○迦○牟○尼○佛○、○是○れ○即○心○是○佛○な○り○、

と、禪門の極致なのである、人々具足箇々圓成なのである、決して我等下根劣機の者は法器に非らずと自暴自棄するのではない、言ひ換へれば我れには尊敬すべき本性がある、否佛陀と同等の性格がある、されば我れ等の行持

釋迦と我  
れとは二  
面裂破  
自負傲慢

木の葉天  
狗

で諸佛の行持が現はれる、諸佛と我れとは同等同權我れと釋迦とは二面裂破である、文珠も普賢も我が使丁であると、斯く自重自尊の自信力を保つて居らねばならぬとの教訓である、さは云ふもの、諸子よ、決して自負傲慢と誤解してはならぬ、自負傲慢の心は現在の我に安じて進修の氣象もなく、獨り其の位地に高ぶりて實質のない空ら威張りして居る俗に所謂る木の葉天狗を云ふのである、今此に云ふところの禪の自重自尊の心は之に反して自己の本分を知り、自己の地位を保ち、而して現在の我に安せず、向上進歩して諸佛と同等同權の大我を實現せんとする大自信力である、

### 三 言行一致

既に自信力があつたならば、自ら實行せんければならぬ、たゞ徒らに口に自信を稱ふと雖も、身に實行せんければ眞の自信でない、此事業は斯々すれば出来る、何の事は斯様にすれば成功すると予は飽まで自信すと謂ふのみでは何の用もなさぬ、自分が一度信じたことならば躬行せんければ眞に信じたではない、實行と伴はぬ自信は自信でない、基督は我は神の子なりと謂つたのみではなく自ら信じて實行したから彼の如き偉大をなしたのである、釋迦は天上天下唯我獨尊、我は三界の大導師ちやと謂ふたのみではなく、自ら斯く信じて實行したから彼の

言行一致

實行せざる自信にあらず

神の子

唯我獨尊

天徳を我れ生ぜり

鳥窠禪師白樂天の問答

如く偉大をなしたのである、孔子とても天徳を我れ生ぜり、桓離これ吾を如何と謂ふのみでなく、自ら斯く信じて其徳を實行したから彼の如き偉大をなしたのである、其他古今の偉人傑士が斯く大なる人格を作したのは其自信を實行して以て自己を發展したからである、即ち自信の存する處百折撓まず千挫屈せざる底の勢力を以て勇往邁進したからである、所が此の言行一致と云ふことはなかく、難いのである、言ふことは易く行ふことは難しとは古哲の格言である、

支那の鳥窠禪師に或時有名な詩人白樂天が問ふて曰く、如何なるか佛法の大意、

と、即ち貴僧の信奉せらるゝ佛法の道は如何なる道でござ

さると問ふたのだ、すると

鳥窠禪師答へて曰く、

諸○惡○莫○作、衆○善○奉○行、自○淨○其○意、是○諸○佛○教、

と、即ち一切の悪事はなすな、一切の善事は行へよ、そして各自が其こゝろを清浄にする、これが所謂我れくの信奉する佛教であると答へた、白樂天大に不審の眉を蹙めて謂ふは

是○は○之○れ○三○歳○の○孩○兒○も○慙○麼○に○道○ふ○こ○と○を○解○す、

と、そんなことは三つ子でもよく言つて居るではないか

と詰問した、すると鳥窠禪師呵々大笑して曰く、

三○歳○の○孩○兒○も○道○ひ○得○る○と○雖○も○八○十○の○老○人○も○行○す○る○を○得○す

三歳の童子もよく道ふ

八十の老人も行するを得ず

孔子の格言

老子の格言

とやっつけられて、流石の博學なる白樂天も是に到つて口壁上でグーの音も出ないで退いたとある、實に善事を行へばよいと謂ふとは誰れでも口に謂ふのだが、サー實行となると誰れにも行へるものでない、孔子も君子は言に納にして行に敏なり(論語)

と謂つてある、老子も

言○ふ○も○の○は○行○は○ず○と

と謂つてある如く實に言行一致は難中之難の業である、白隱が如何に内觀法の真修はドーぢやの、氣海丹田はドーぢやのと鼓吹したゞけで、其の自信を實行して即ち言行が一致しなかつたならば、彼れは徳川三百年間傑出の偉人として今日に推稱せられぬであらう、彼れは其の丹

田氣海の内觀法の眞修を自信以て實行して其範を後世に垂れた、今其一例に斯ういふ話がある、

白隱禪師が二十三歳の頃であつた、三人の同參と共に播州から兵庫へ行きそれより舟に乗つた、其夜は幸にして月明晝の如く、四海波靜にして龍の眠り穩かで、さながら瑠璃盤上に金波銀漣の閃く風景を賞しつゝ、舟は漸々沖に出る、禪師は何時の間にか熟睡して鼾聲訥々と雷の如くである、時に天候忽ち變じて墨を流したる如き雲起り一陣の颶風吹き起り、山岳崩んばかりの怒濤となり、今にも船は覆沈せんかと船中一人の生氣あるものなき有様である、暫時にして幸ひ船は此の難を逃れて大阪へ着した、すると白隱漸く目を覺まし寐惚眼を擦りながら見

白隱禪師の中  
内觀法の師  
實行して  
大に風を  
知らず

て見ると船はまだ依然として動かない、乃で白隱船頭に向つて謂ふに、オイ船頭さん如何したのだまだ舟を出さぬのかモー夜が明るではないかと云ふと船頭大に立腹して、ヤー此の寐惚坊主め何を寐言をついて居るのだ、前夜兵庫を出る時一所に漕ぎ出した船は幾十艘となく颶風の爲めに顛覆して仕舞つたではないか、此船ばかりが幸にして我れ始め御客様方が一生懸命に太神宮様や金毘羅様へ信心して、龍神様へは齋を切て奉納して下すつた御蔭で漸くの事に九死に一生を得て今此に着いたのである、然るに斯る懸命の場合で大勢が生ける氣色もなく泣いて騒いで居る中にお前は兵庫を出るからグツク高鼾で此の騒ぎを夢にも知らぬクセにまだ舟を出さぬかなど、不足

大膽不敵  
の大寐惚  
坊主

らしく云ふは何事だ、寐言をつくしも程がアラ！早く顔でも洗つて來るがイー、この寐惚坊主め、アーオイラモ二三十年このかた船頭渡世でやつて來たが今日御前のやうな大膽不敵の大寐惚坊主に遭ふたは始めてゝあると怒鳴つた、所で白隠ニコ／＼しながら、オーさうであつたか更に知らなかつたわいと、ソコらあたりを見廻せば乗客はまだ船暈に惱まされ、或は鉢巻をして居るものもあり、或は半死半生の體で舷で嘔吐するやら、ウムウムと呻吟するものも居ると云ふ有様、アーでは船頭の立腹するの無理からぬことだわいと、これこの一例に見るも禪師は氣海丹田で鍊り上げたる内觀眞修の力が強大なるものであつたが、如何に非凡

掠虚頭の  
漢  
大高生  
實頭の漢

常識を逸  
する勿れ

なる大人物であつたか、分るであらう、畢竟するに禪師が其の廣大なる自信力を以て其唱道せる事を遂行したのであつて即ち言行が一致したのである、要するに諸子、如何に獨立自尊は吾人に必要である、自重自尊の心はなければならぬと云ふも、自信力もなく、言行も一致せんければ、眞の獨立自尊でない、眞の自重自尊でない、其等は所謂空腹高心の掠虚頭の漢である、自負高慢の大高生である、近來の所謂禪者多くは此類に屬する、請ふ青年諸子須らく實頭の漢になつて貰ひたい、

### 第十章 常識を逸する勿れ



兎角坐禪でもして公案の一つも拈提してナンカンと法螺でも吹くやうになると、モ一悟り臭ひ顔して、ドコとなく凡俗を超越した風をしたがる、そして何でも尋常人のなさゝる飛突か若しくは間抜けか若しくは無頓着らしき事をやつてさながら俗脱けした様に思つてる偽禪者がある、眞の禪は決してソんな突飛や間抜けや無頓着らしくて得らるゝものでない、眞の禪は決して常識を逸したものではない、若し常識を逸し常道を離れねならばソハ禪ではない、上乘となる禪は常識の發達したものでなければ得られぬ、即ち悟道者とは常識の圓滿したるものを云ふ、是に就て支那の趙州和尚が南泉和尚に問ふた事がある、

眞の禪者  
は常識に  
富む

平常心是  
れ道

一 平常心是れ道

是れは彼の無字の公案を拈出して天下の禪僧を困らせた趙州和尚と南泉和尚との問答である、無門關には平常心是道と云ふて四十八則の中の一の公案となつて居る、今諸子の参考までに這箇の公案を拈出する、

南泉と趙  
州との問  
答

南泉に因に趙州問ふ  
如何なるが是れ道、

と、サテ聖人や賢人が説かるゝ大道眞理と云ふものは別に甚深微妙のものがあるかと問ふた、南泉和尚は答へて  
平○常○心○是○れ○道○

と、ハ一ナニも道と云ふて世の常の道にはづれて別に高

爺は山へ  
柴蒨りに  
婆々は川  
へ洗濯

尙な處のみにあるものではないよ、人々平生飢來れば飯を喰ひ渴し來れば水を飲む、爺は山へ柴蒨りに婆々は川へ洗濯に平生の心が是が皆道である、趙州まだこれで會得ができたぬと見えて重て問ふに  
還つて趣向すべきや否や  
と、成程一應は分つたが其れではあまりわけなさうだが外に何かまだ深い趣きがあつて學人が探求すべきものがなきやと、南泉和尚婆心止みがたく又答へて、  
向はんと擬すれば即ち乖くと、  
ヤア強て向つたら却て道に乖いて仕舞ふぞ、鴨の脚が短いと云ふて強いて繼ぎ足したならば却て鴨が迷惑する、鶴の脛が長すぎると云つて之れを斷ち切たなら鶴が

鴨の脚短  
鴨の脛長

山はこれ  
山はこれ  
水はこれ  
水はこれ

困まるだらう、山は是れ山、水はこれ水、これ皆道の露現ではないかドコへ向つて道を求めんと擬するかとの意、所が趙州なほ推問して、  
擬せずんば争か是れ道なることを知らんと、其れでは人々如何々と工夫辨道するは何の爲めであるか、即ち擬議工夫せんければ如何して是れ道であることが知れやうやと、南泉老ますく、婆心を起して懇切に答へた、  
道は知にも屬せず不知にも屬せず、知は是れ妄覺不知はこれ無記、若し真に不疑の道に達せば猶ほ太虚の廓然として洞豁なるが如し、豈に強いて是非すべけんやと、  
マ一困つたものぢやナ、道と云ふものは知るの知ら

ぬと云ふ筈のものではない、強いて知ると云つたならば  
 それ妄想智覺で真知ではないぞ、さればと云ふて不知と  
 云つて仕舞へば無記性で丸で木石の如きものだ、乃で若  
 し是の知るの知らぬのと云ふ所の境界を超えて一點の疑  
 惑ない道に達し得たならば夫れはく其時こそはなほ太  
 虚空のクワラッとして一點の塵雲もなく實に十方通暢無碍  
 自在となるものである、サ一是の當體に至つて豈に彼れ  
 此れとは非分別に涉るべきものあらうやと、趙州言下に  
 於て頓悟したとある、乃で無門は此消息を頌して、

無門の頌

春有百花秋有月  
 夏有涼風冬有雪  
 若無閑事挂心頭

お三婆々

白隠禪師  
結婚を歡  
めし

便、是、人間好時節

と、平常心是れ道の端的を頌し得て妙ではないか、サテ  
 これは支那の禪僧の話であるが我邦に於ける高僧にも是  
 れと同じやうなことがある、ソハ白隠禪師とある老婆と  
 の問答である、時にお三婆と云ふ老婆があつて白隠禪師  
 に參じて隻手の聲を聞くと云はれたについて、直下に

白○隠○が○か○た○て○の○聲○を○聞○か○ん○よ○り○  
 兩○手○を○打○つ○て○あ○き○な○ひ○を○せ○よ○

と口吟したとある、是れ即ち平常心これ道を道破して居る、  
 白隠禪師一日駿州庄司氏の娘におさつと云ふに結婚は  
 人生の一大事たることを勸諭して

汝○已○に○佛○法○を○見○得○す○、○何○ぞ○世○法○を○嫌○は○ん○、○速○か○に○好○配○

を得て、父母の意を安んぜよ、婚姻は人間一生の大事なり、

と、世人は兎角佛法に入るとか禪門に入ると早くすでに世俗と離れなければ眞の道業は修されんとのやうな了簡を出して家業を廢し、學業を放擲するものがあるやうである、殊に現今の女學生などの中には生涯獨身主義ぢやなど、父兄や親戚の意見も馬耳東風で遂に却て救ふべからざる墮落の深淵に沈んで仕舞のである、かゝる輩は宜しく白隠の教訓に接したならばよからう、

乞食桃水  
と京都の  
豪商

又洞家の偉人に乞食桃水と云ふ和尚があつた、肥後柳川の名藍を棄て、乞食の群に入つて所謂和光同塵の菩薩行を修して居た、或時京都の豪商が桃水の道風を慕ひ

味噌は寒  
中酔は土用

五條橋下の乞食の群から桃水を請じて禪道の要義、即ち禪家の悟道は如何なるものなりやと問ふた、時に和尚カラ、と笑ひ天井を眺めて答ふるに  
禪のお悟りと申したとて左様六ヶしきものではない、味噌は寒中に造るがよし、酔は土用中に醸すがよからう。

と答へたてふことがあつたやうだが、これ等皆是れ平常心是れ道の端的を道破して居る、即ち道は決して遠方ではない觸目現前皆これ道の露現であることを説破したのである、

日々の行  
事是れ正  
道なり

## 二 日々の行爲是れ正道

平常の心が是れ即ち道であると徹見したならば、平常の行爲が即ち道の行ひである、學生諸子が其學課を研究するも、商家は商業に勉強するも、農家は稼穡に黽勉するも、官吏は職務に精勤するも政治家が社會國家の爲めに盡力するも、雀のチウ／＼も鴉のカー／＼も皆これ道行の現はれである、これも支那の話であつたが、地藏と云ふ和尚と或僧との問答がある其れは地藏種田の話と云ふ公案である、或僧が地藏和尚に佛法大道とは如何なるものであると問ふと、地藏答へて云ふ、左様さ其れは百姓等が田植の時に畔に腰打ちかけて、握飯を喰ふてるわいと、彼の愛らしい早乙女等が聲を揃へて田植へ歌を謠ふて、暫時の休息に畔に腰を息めて搏飯を喰ふのが眞

地藏種田の話

道元禪師の正法持是の謝

に思無邪ぢやこれが即ち赤裸かな大道であるとの意だ、

又道元禪師はこの消息を示誨して  
唯當さに日々の行持其報謝の正道なるべし、謂ゆるの道理は日々の生命を等閑にせず、私に費さざらんと行持するなり、

と、然り、諸子禪の悟りと云ふものは、決して常識を逸したる世の變り物を云ふものではない、世事に遠かり、俗離れせにや悟れぬものではない、日用行中運作轉動が皆これ禪道の極致である、言ひ換へれば人々各自の職責を務め、其天分を全ふするの外、道は別にない、中庸に云ふ

夫子の道は費にして隱、夫婦の愚なるも能く知ること

中庸に於て夫子の能く知るも

を得、

と、請ふ人々の脚下に眼を着けて觀よ、

### 三 惡平等なるなかれ

道本圓通争でか修證を假らん、宗乘自在何ぞ工夫を費さん

と、これ向上第一義の見地に立つての消息で、即ち禪の平等觀である、所謂此境界に到達し、此見地に据つたならば初めて開單展鉢するも屙屎放尿も皆なこれ禪ならぬはない、日用光中の運作轉動皆これ禪道の極致ならざるはない、然るに古今の禪學者多くは此間の消息を誤解して、自から差別界にありながら、猥りに平等的見地に

惡平等なるなかれ  
道本圓通

平等の誤解

鴨鶴の眞似する

大象に大悟

立つもの、如く、諺に云ふ、鴨が鶴の眞似して水を呑み、しかも揚然誇言して云ふ、大象は兔徑に遊ばず、大悟は小節に拘はらずだ、ナ一に些々たる細瑾を顧みるに及ばぬ、ナニ戒律などは小乗律僧のすることぢや、大乘圓頓戒はソナナ束縛したるものではない、姪怒癡即佛法ぢや、煩惱即菩提ぢや生死即涅槃ぢやと、時に或ひは酒肆姪房に出入し、時に或ひは寡婦小女に慇懃し、而して恬然愧づる色なく、若し傍人の詰責するものあれば却つて高言して云ふ汝輩争でか大乘極致を旨とする者の行動を知らうや、禪は無頓着主義で、事々物々に執着するを禁止するの宗旨である、故に野僧などの行ふことは見るまゝ、脱落聞くまゝ、脱落である、即ち沒蹤跡斷消息である、古歌

池の面の

に  
池の面に月は夜なく通へども  
心もとめず跡ものこさず

で、これ即ち禪者の無作略自在の行動であるわいと、成程眞に平等界大悟界に到達底の活禪者であるならばさもあらう、否、實にあるべきであらう、されどたゞ恨むらくは斯る活禪者は千中無一であることである、多くは皆差別界にあつて平等界を眞似るのみ、畢竟これ悪平等の悪観である、嗚呼斯る輩は獨り自己法身の慧命を失却するのみでなく、惹いては社會人道の爲め大害毒となる、故に諸子、この平等と差別を混同してはならぬ、平等は大悟界である、差別は修行地である、修地に在つて猥り

悪平等惡

人道の大害

大悟界修行地

天才と生知安行

寶鏡三昧の

に大悟界に遊ばんとするは、恰かも、小中學校の生徒にして徒らに學士博士を眞似るやうなものである、如何に圓通なる大道といへども、修せざれば證せず、證せざれば得ることなしで、如何に天才であつても多少の習修を積まんければ絶妙の技倆を發揮することはできぬ、如何に生知安行と云ふも多少の修行を経なければ悟界に到ることはできぬ、況んや其他天才たらざるもの、生知安行たらざるものをやである、須らく大勇猛大精進の意志を以て積苦累徳難行苦行しなければならぬ、古徳は云ふ(寶鏡三昧)  
銀碗に雪を盛り 明月に鷺を藏す、  
類して齊しからず 混ずるときは處を得ず、

第十章 常識を逸する勿れ 悪平等なるなけれ

銀碗と雪

明月と鷺

味噌と蜜

と、見よ白銀と雪とは同白色である、明月と鷺も同白色である、されどこれ決して同一物でない、銀碗は雪とするわけにはいかぬ、鷺を明月にするわけにもいかぬ、雪は是れ雪、銀碗はこれ銀碗である、明月は天に輝き、鷺は沼洲に栖んで居る、これ類して齊くない、然るに之を混同したならば大間違である、即ち平等中に差別あり、差別中に平等あることを示された語である、若し混同したならば所謂る味噌クソ同一となしたる悪平等に墮して仕舞ふ、

冀くは夫れ參禪の諸子、須らく人々各自の脚下を照顧し、徒らに天上の月のみを貪り見て、掌中の珠を失却せざる様實參實究し、而して平等と差別、差別と平等を誤

解混同のないやうにするが肝要、

禪の道徳觀

禪は心學

無功德の誤解

### 第十一章 禪の道徳觀

或る者は言ふ禪は心學であつて専ら自性の鍛錬に汲々たるものであるから、其の心を他人の救済に用ふることは不可能である、加之ならず、一體禪宗の教理は慈悲善根を積むを以て無功德であるとするの主義であるから、畢竟道徳を無視することになる、剩さへ禪の本義は出世間的であつて人道を度外視する教義であると、これ何たる盲評であらう、如何にも自性徹見は修禪の要ではある、けれども其の自性徹見の目的はドーぢやと云ふにこれ外ではない、上には道を求め、下は群生の教化を措いて他



に目的はないのである、されば如何に自性の鍛錬に汲々たればとて衆生濟度が出来ないと云ふの理はない、鍛錬しつゝ、それが即ち衆生濟度となるのである、道元禪師の教へに

凡そ菩提心を發すと云ふは、己れ未だ度らざる先きに一切衆生を度さんと發願し營むべし、

と、これ佛教では大乘菩薩の誓願としてある、經に自未得度、先度他とある、洞家では本證妙修と云ひ修證不二と云ふ、一體禪は實踐主義である、口頭言語を以て教化するのではない、身の行ひを以て衆生を感化するのである、何を以て禪は道德を無視すると云ふや、殊に前にも言ふ如く禪は人本位であるから人格を重する主義である、争

道元禪師の教訓

本證妙修  
修證不二

でか道德を説かんで居られやうや、

然り然らば禪は如何にして其道德を説き、否、實踐するか、彼れ忠孝仁義は勿論、智仁勇の三徳等すべて道徳律範疇にあるものは唱道もし且つ實踐もする、がしかし、其が中に就ても殊に禪の特色とも云ふべきものは無我の觀念、慈悲の觀念、清廉高潔、質素勤儉、生死不二の觀念等である、已下少しく是等の概要を略叙して諸子の實踐を希望する、

### 一 無我の觀念

禪宗に無我と云ふのは、言ひ換へれば真正の利他である、自己中心ではない愛他主義である、博愛主義である、

無我の觀念

即ち我れを忘れて他を利するのである、道元禪師が己れ未だ度らざる先きに一切衆生を度せよとあるはこゝである、我と云ふものが吾人の念頭にあつてはドーでも眞の無偏平等の大慈悲は行はれない、であるから禪は自他の差別界を離れて無我の平等界に在るを主義とする、井上博士(巽軒)の小我を棄て、大我に入るの主義と同様である、孔子の所謂る、己れ立たんと欲せば先づ人を達せしめよと謂ふもこゝの消息を漏して居る、我國の武士道の上に確かに此無我觀念の暗示を與へて居つたのである、ソハ古英雄の言行に觀ば明瞭である、彼れ等は區々なる差別界に偏せず眼を無差別平等界に注ぎ、自他愛憎の情念を斷じて、上は國君の恩に感じ、下社會同胞の爲めには

井上博士の大我の格  
孔子の格  
無我觀と古英雄

楠正成の無我觀

自己の利害得喪をも顧みず、全く自己を没して死は鴻毛よりも軽く、義は泰山よりも重しと覺悟して無我の眞境に入つて活動する、彼の楠正成が口吟んで  
身○の○爲○め○に○君○を○思○ふ○も○二○心○  
君○の○た○め○に○と○身○を○も○お○も○は○じ○

と云ふたのも眞に我れを忘れたる無我となつたのである、或る人は言ふ、武士は死後の名譽を求め、生きては功勳を表旌するを望むからつまり交換主義の道德であると、楠公の如きは決して死後の名譽や生前の功名を得んがために彼のように誠忠を、盡したでないそは前の歌に見ても判別さるるではないか、彼の無我的道德は決して他の返報を期待し感謝を望んで善を爲し、仁愛を施すと云ふや

報謝を待たざる眞の道德

基督の格

うなケチ臭ひ道德ではない、返報を期し禮謝を望みて行ふはこれ眞正の道德ではない、禪には斯るケチ臭ひ道德を有漏の善根、有所得取引道德と云ふて排斥するのである、道元禪師が、這箇無返報無報謝の眞の道德を諭示して窮龜を見、病雀を見しとき、彼れが報謝を求めず、唯單に利行に催さるゝなり、愚人謂へらくは利他を先とせば、自が利省かれぬべしと、しかにはあらざるなり、利行は一法なり、普く自他を利するなり、

と、全く無我觀に入つたでなければ、眞に無漏の善根無所得の道德は行はれぬ、彼の基督が右の手を以て施さばこれを左の手に知らしむるなと云ふたも、此無我的博愛を爲せと云ふに外ならぬのである、返報を求め報謝を期

鐵舟居士の無我觀

私の小我公の大我

待するは自己を中心として計量するのである、方今の慈善家と稱するものが、大々の廣告を新聞や雑誌に書き立てるなどは皆自己中心の僥善者と云はねばならぬ、彼の山岡鐵舟居士が

誠を以て私を殺して萬機に接すれば、天下敵なきものにして、是れが即ち武士道である、故に日本民族の大道である、

と、これは是の誠を以て私を殺すと云ふ、即ち無我である、言ひ換れば私の小我を殺して公の大我を發展させるのに外ならぬ、斯の如く禪の無我的觀念は如何に我國特有の道德たる武士道に感化を與へたるかを知るべきである、されば現今の青年諸子よ、餘り各自が我れと云ふに執着

すると眞の日本民族の特性を發揮することは不可能である、のみならず、我に執着するから、種々の煩惱妄想が起つて来る、乃でつまらぬことに煩悶懊惱することになる、畢竟我れてふ奴が何物である、我れと云ふ奴は何處に栖んで居るかと一つ自分頭のギリ／＼から足のつまさきまで探ぐつて見るがよい、サイドコにあるかドンな面して居るか、古歌に

櫻木をうちわり見れば何にもなし

花のたねとは何を云ふらん

とある、これ無我無心の消息を道破した歌であらう、

## 二 慈悲の觀念

慈悲觀

我の所在  
樹木の歌

小我をすて、大我に歸するれば、其當處々々が即ち慈悲の權化となるのである、慈悲は佛教の最終の目的である、されば今更に禪の道德として揚ぐるの必要はなからうと思ふ人もあらう、所が禪の慈悲とて成程他普通佛教とかけ離れて別にあるわけでは無論ない、されど禪の慈悲は眞の無我觀から来る慈悲であるから、宛親平等の大慈悲である、即ち自他一枚なる平等の大慈悲である、であるから生類は勿論草木にまで及ぶのである、斯ふ云ふと諸君子草や木は無情でないか、あんな非情類に何の慈悲を施すところがあると、成程此の間の消息は一寸青年諸子には分り兼ねるだらう、是れは禪宗には生佛一如、色心不二と云ふことがある、即ち向上一路の端的から見

るときは衆生ぢやの佛ぢやの、ヤア主觀ぢやの客觀ぢや  
 のと云ふ差別を見ないのである、乃で色心不二の見地か  
 ら見ると、盡十方法界の土地草木瓦礫も皆な佛事を作し  
 佛法を説いて居る、即ち一切の事々物々悉く水鳥樹林念  
 佛念法念僧と聞ゆるのである、井上博士はこれを同情を  
 以て世界を觀ると皆活きて來ると云はれて居る、  
 世界は同情的に見ると、すつかり活きて來る、根底に  
 於て、共通して居る所がある、そこで植物と吾々と同  
 じ形を持つては居らぬけれども、皆有機體である、生  
 物である、やはり斯様な處に突立つて居る、さうして  
 中々同情の點から見ると非常に趣味が多くなる、柳な  
 んぞあると實に枝垂柳の姿のたをやかな所なんぞは、

實に其風情の多きこと言ふに言はれない、海棠の雨に  
 濡れたる所、其のしをらしきと尋常でない、斯の如く  
 同情を以て見ると花も美人の如くに活きて來る、自然  
 も斯様に悉く同情化して見ることが出来る、唯草木ば  
 かりではない、次第々に推して行くと、總べてが然  
 りである、石と雖も活きたものに見える、石の突立つ  
 て居るのを見て御覽なさい、沈黙して此方を睨んで居  
 る何を考へて居るか分らぬ、山を見て御覽なさい、山  
 はズ一つと雲表に聳えて突立つて居る何か意味ありさ  
 うである、云々(東亞の光)

と、これ彼の東坡が  
 溪聲即ち是れ廣長舌、山色豈に清淨身に非らんや、

宗教録

と、又宗教録に  
 境は是れ即ち心の境、心は是れ即ち境の心、能く一體  
 無異を分つ所以

と、の見地と同意にして色心不二心境一如の當體、宇宙の靈體と我と冥合一致して一體無異の眞理に體達せる消息である、禪の慈悲觀はかゝる處にあるのである、予輩幼年の時徒らに路傍の草木を伐採して遊戯として居つた、或時母が其れを見て汝は無益の殺生してはならないよ、佛様は草や木にも皆性があると教へて置かれたからには草木なればとて何の益なしに徒らに伐採するは咎があるのである、見よ彼の切口から出づる水は人間にすれば彼れは血液であるぞと。サンく、呵責せられたことは今でも忘れ

慈母の訓

ないが、今になつて母の教訓を考へて見ると所謂心境一如、色心不二の平等觀の道理を我母が訓へて呉れたのである、追懷せば轉た感慨に堪えない、こは餘事であるが、こゝに慈悲の實行について黄檗鐵眼和尚が活きたる一代藏經を刻成したと云ふ美談がある、修養の爲に茲に掲げる

鐵眼禪師

鐵眼禪師が我邦に一代藏經の刻板なきを憂ひて彫板せんと發願して諸方勸募し大藏三返まで開板したが、初めの二回は生きた藏經で後の一回は死んだ藏經を開板したと云ふのも此大慈悲を實施した話である、即ち鐵眼は諸國を勸募して多くの寄附金が集まつた、乃で今や翻刻に着手しやうとするに際し國內大飢饉であつた、すると鐵

眼惜げもなく窮民に皆施してやつた、再度まで勸進したが、其れまでも又候五穀不熟で國內餓死の多きを見るに忍びずして、又悉く施して仕舞つた、人の之を詰るに對して鐵眼は云ふ、

佛法の本願は世を救はん爲めである、世が治まりてこそ、佛書の必要もあるが、民の塗炭に苦しむを見て、之を救はずに居られやうや、これ予が彫成の淨財をも、口みる暇なくして施す譯である、

と、かくして三度目の勸進で漸く大藏經も刻成した、これ實に自他を氓絶したる大慈悲を實行したのである、眞に活きたる一代藏經を刻成したのである、苟くも世に救世者として否爲政治家として社會に立つの士は斯大心がなけ

鐵眼の活きたる藏經

澤庵禪師の城郭心

古歌

ればならぬ、彼の澤庵は當時の爲政治家に論して池水堀溝は眞の城郭でない、眞の城郭は心の城郭である、心の城郭とは何であるかといふに仁慈恩惠であるとの主意を説いて居る、即ち

心○に○城○郭○を○構○ふ○べ○し、心○の○城○郭○は○人○破○り○が○た○し、石○を○積○み○池○を○掘○り、水○を○貯○へ、専○ら○之○を○以○て○敵○を○防○が○ん○と○欲○す、敵○も○亦○謀○計○な○き○に○あ○ら○ず、石○を○削○し、池○を○割○り、水○を○落○す○と○きは、即○ち○城○郭○は○平○野○と○な○る○な○り、恩○惠○を○施○し○國○民○を○撫○育○せ○る○時○は、即○ち○誰○あ○り○て○か○吾○に○敵○を○な○さん、これ心の城郭なり」

と、これ即ち仁者に敵なしとの意である、古歌に  
佛○と○は○な○に○を○い○は○ま○の○こ○け○む○し○ろ

たゞ慈悲心に如くものぞなき

とある如く、佛陀の本懐はたゞ此慈悲心の實現にあるのである。禪宗の悟道者と云ふも畢竟此慈悲の心を實踐躬行して社會平等の利益を計るのである。悟道者と云ふて社會を逃げ俗を出で、自分獨り閑寂に枯坐して居つては眞の悟道でない、即ち悟後の修行がなければ死佛である、然り、悟後の修行とは何ぞこれ慈悲心の實行である、しかし諸子、此平等の大慈悲は夙に我神州男子の清血中に浸潤して居るではないか、豈にこれたゞに佛者の事のみと片付けたまふなよ、見すや、彼の古武士が戦闘中の舉動を、近くは日露の戦争の時の如きを、交戦中は敵味方のけじめあれど、若し個人くとなつたならば相互些の

其の悟道  
家

四海同胞  
主義

上杉謙信  
の慈悲

赤十字社

敵としてはなく、四海同胞主義である、剩さへ既に戦闘力盡き果てたるものには味方と同様に取扱ふのである、此れ二十世紀の新現象のやうに思ふかなれど、此の精神は我邦武士間には古來よりちやんと行はれて居つたのである、彼の上杉謙信が武田信玄とは永年の讐敵の間でありながら、甲州の人民が北條氏の爲めに苦しめられて居るしを聞き、ア我れ信玄とは永年干戈を交へて居る中なれど、甲州人民には何の怨恨もない、今彼の人民が醜苦を聞いては救はでは濟まぬ我精神、早く早く甲州に食鹽を贈つて遣はせと勘定奉行に命じてドシく、と越後鹽を贈つてやつたと云ふ美談があるが正しくこの消息である、又彼の赤十字社などのやりかたも此平等大悲を實現



したのである、總ての設備から其の形式は西洋の文明式ではあるが、即ち文明的二十世紀風に現はれて居れど、この精神たるや日本の民族間には既に已に行はれて居つたのである、これ即ち禪の慈悲の觀念が大に武士の精神中に暗示して居るのである、イヤ敢て過言ではなからう、

### 三 清廉高潔

古來の高徳は其の世に處する清廉高潔である、で貧富の爲めに心情を動かさず、富力權力は禪界の禁物である、常に法喜禪悦の甘味に飽滿して道の爲めに道を修するのである、梅尾の明惠上人は北條泰時を教化して、能く天下を治めしめた高僧であつた、時に泰時御禮として丹波

國の大庄の一所を寄進せんとせし時に、上人拒辭して、斯る寺に所領だにも候はゞ住する僧ども、いかに懶惰懈怠にふるまふとも、所領あれば僧食闕し事なし、衣裳補へぬべしなど思ひて無道心なるものこもり居て、………合力歸敬の輩もなければ隨日衰微して荒廢の地とのみなれり

と云て受けられぬとか、是等は實に清潔氷玉のそれの如くである、是れ實に古來高僧の氣風である、彼の永平道元禪師が身貴族の出にも拘はらず、却て其が權勢を嫌ふて、歸朝の後も深草に閑居し、ソコも遂には都近いで紳縉公侯等がやつて来るを五月蠅さしと思ひ、次で越前の山中に隠れて一寺を創立した、後に鎌倉の執權北條時頼

時頼の寄絶す

元明を放逐す

遺元禪師の高潔を後醍醐天皇の賜を辭す

五山の僧徒の墮落

が聞法の法禮として伽藍を建立して請したれど、遂に斥け、而かも寄進狀を所持して歸つた高弟元明を放逐して剩へ元明の坐した床下の土を七尺掘て棄てたと云ふ、又後嵯峨天皇から紫衣を贈り給へしを辭すること再三、遂に勅許にならぬで、一偈を打して生涯高閣につかねて置かれた、其偈に

永○平○谷○淺○し○と○雖○も○、  
勅○命○重○き○こ○と○重○重○、  
却○て○猿○鶴○に○笑○は○れ○ん○、  
紫○衣○の○一○老○翁○、

と、これあまり極端に偏するの嫌ひはあるが、しかし宗教家の本分をよく守つて權勢に左右せられぬと云ふ宗教家の權威を示して、後世に模範を垂れたのである、

足利の末五山の禪僧等が徒らに文字の奴隸となり貴族

皇室の落胤

一休和尚の高潔

賜紫衣を辭する詩

權門に阿諛し、榮耀榮華に驕り宗教家の本領を没して、却て自得揚々たるもの、中に立つて獨り身は皇室の落胤なるにも拘はらず、極めて平民的に、極めて清廉高潔にして洒々落々たるものは誰れであらう、これ紫大徳寺一休和尚其人である、和尚は年八十一歳の時、朝廷の勅命を以て大徳寺の住持たるべき恩命を賜はつた、時に和尚大に有難迷惑そうに其意を一首の偈に漏して、

五○十○餘○年○、  
簑○笠○淡○如○、  
勅○黃○捧○照○、  
無○不○愧○懷○、

と嘆吟し、又紫衣を賜はるに及んで、一詩を打して、紫衣を高閣に掛けて、生涯着用しなかつたと云ふ、其詩に  
大○燈○門○弟○滅○殘○燈○、  
難○解○吟○懷○一○夜○氷○、

青年と禪  
五十年來簑笠客、愧慚今日紫衣僧、

と、何ぞそれ高潔なる、彼れ永平道元禪師のそれと好一對の美談であらう、彼れ一世を玩弄し諧謔滑稽にして世人に氣狂坊主の如くに嘲笑せらし一休和尚も其心事の自ら清廉にして高潔なる眞に禪流の活龍と謂ふべきであらう、

近世では彼の風外和尚などは實に清廉潔白のエラ物であつた、風外和尚は上州は碓井郡大鹽の人で、禪宗の偉僧であつた、相州曾我中村の山中に穴居して居つた、時に穴居の偈に

道人坐臥寸心間、人却不移這壑邊、  
風動槐安樹下夢、六窓深閉覺還眠、

禪流の活龍

風外和尚の清廉潔白

穴居の偈

と、其後小田原城主稻葉侯は大に風外の道行を慕ひ人を遣はして、懇ろに城中に請聘した、時たま〜城内に來客ありて侯と客と酒宴の最中であつた、乃で久しく風外和尚を客間に待たして置いたのである、スルと風外心中で大に喜ばずして直に筆を取つて

大守一國鎮、我是風外坊、  
卒客無卒主、宜假不宜眞、

との一偈を傍の屏風の上へ墨くろ〜と達筆に書いて、飄然として去つて仕舞つた、所が侯ます〜その高德に感じ、眞鶴山の極めて風景の好い處を擇んで寺を建て、開山第一世に請じたけれども風外は遂に應じなかつた、で止むを得ず黄檗の鐵牛禪師を聘して開山とした、後に

稻葉侯の屏風に落書せし偈

鐵牛と同道して風外和尚を訪はれた、時に鐵牛禪師の云はるゝには、かく世を逃れ寂靜を旨として修禪せらるゝこと洵に羨ましきことなりと、風外和尚の答ふるやう、世を遁るゝはいとく造作もなきことなれど、唯出家の後の出家はむづかし、おほかたの僧は、姿は圓頂法衣なれども、心の内は在俗に劣れり、

と、かゝる禪僧の氣風が實に我邦の士道に識らず知らずの間に浸染し感化したので、彼の武士は喰はねど高楊子などいふて氣品高く、清廉に居り、而して武士の體面を汚さず、武士の品格を失墜せざるやうに、且つ一般下民の模範を示すべき地位にたつてふ自重心を養成したるは確かに斯る月白風清してふ禪僧の氣風が興つて力あつたで

山鹿素行の  
教示

あらう、彼の山鹿素行が武士の清廉について云ふてある、大丈夫清廉を守らざれば、公につかへ父母兄にしたがつて、利害此に萌ざして、天性の心を放出すべし、清廉と云ふは外の賄賂、内の財貨をさらし心に付けずして、世人の難行處に卓爾として立て更に不屈、これを清廉といへり、内に清廉なるところあらざれば、外少しの利害に奪はれて、其の守りを失ひ、心こゝに放すべし、されば孔子は「忍渴於盜泉之水」云々、

と、大に士に清廉の必要を訓示して居る、實際人は利害の觀念が頭にあつては到底社會人生の爲め挺身以て事を爲すに堪へん、で古來苟くも救世者となり政治家となりて大なる事業を爲したるの士は其が僧たると俗たるとを

古來の救  
世政治家

近來の政治家救世家

學者官吏教育家宗教家

清廉と貧困

問はず、皆其の身を清廉潔白に處したのである、然るに近來は大に之に反して多くのものは耻をかいても得は取れてふ主義に傾き、堂々たる大政治家を榜するものにして猶ほ其裏面に至つては彼狡猾なる市井の商賈にも勝る破廉耻をなして自腹を肥さんとしつゝある者のみ、其他學者然り、官吏然り、教育家然り、宗教家然り、苟くも横目豎鼻の人として誰れか利の爲めに奔り名の爲めに汲汲たらざる者あらうや、然るを稀れに廉耻を知り潔白に處する者を見るに皆貧困にして世に容れざるやうなる不遇者のみである、で多くの愚者は少しく利のある方には叩頭拜趨して用なきに御機嫌を伺ふ有様、假令高德有識者たるも清貧高潔の士には訪ふも一文錢の利を得るの見

東洋君子國有財餓鬼

一滴愛國の血涙

意氣地なき青年

込なきゆるる門を過ぐるも願みざる人情、嗚呼昔日東洋の君子國と呼ばはれたる我邦の同胞中にかゝる有財餓鬼の多くあるに至つては國家社會の前途に向て實に浩歎せざるを得ない、覺醒せよ現代の青年諸子よ、諸子は一滴愛國の血と涙とがあるならば、此時此際、誓て彼等大厦高樓に飽食暖衣せる、將た遊里青樓に淫樂に耽りつゝある有財餓鬼等を羨まず、蹶然奮起して將來國家の中堅たるの準備をなせ、ソガ準備とは何ぞや、曰く自ら處する清廉潔白、而して國家社會の爲め自己の天職を勤勉するにある、やゝともすると諸子即ち今の青年と稱する人の中には随分意氣地無きものも多く見えるやうである、まだ二十歳やそこ〜で、まだ乳臭い年若き分際で、イヤ家庭

老青年

物質の豊  
富元氣の豊  
富

格言

竹言

はドーの、イヤ生活は何んのと世帯じみたることを云々  
 して老青年振つて頭を煩まして居つては是こそ國家將來  
 の爲めに長大歎息せざるを得んである、忘るなよ諸子清  
 廉潔白は物質的には貧乏である、されど精神的即ち元氣  
 に至つては甚だ富饒である、物質の豊富と元氣の豊富と  
 其れ孰れが勝利を得るであらう、曰く元氣は最後の戦勝  
 者である、請ふ青年諸子奮つて最後の勝利者となれ、今  
 元氣養成の薬餌として左の數言を呈供して置く、  
 士は渴しても盜泉の水を飲まず、  
 飢ても惡木の下に宿らず、  
 鷹は死すとも穂は啄まず、  
 潔白なる人は完全なる鋼衣を着す、

月照の歌

論語

大和俗訓

佛陀の訓  
言

碧巖錄

いつはりて活けらんよりは白露と  
 身は潔よく消えも果てなん、(月照)  
 不義にして富み、且つ貴きは、我に於て浮雲の如し、  
 (論語)  
 廉潔にして貧賤なるは、不義にして富貴なるに勝れり、  
 (大和俗訓)  
 廉士は財を愛せざるにあらす、之を取ることを道に由る、  
 財と色との人に於ける、人之を捨てざる、譬へば刀及  
 に蜜ある、一餐之美に足らざれども、小兒之を舐れば  
 則ち舌を割くの患あるが如し、(四十二章經)  
 玉は泥中に向つて潔く、松は雪後を経て貞なり、  
 (碧巖頌の下語)

虛堂錄

雪後始て知る松柏の操、事難ふして方に見はる丈夫の

普燈錄

心、(虚堂錄) 風吹けども動せず天邊の月、雪壓せども摧け難し湖底

の松、(普燈錄) 月白く風清し、

如上の薬餌を服して、宜しく浩然の氣(元氣)を養成せよ、

寡慾勤儉

#### 四 寡慾勤儉

格言

儉に非んば以て廉を養ふなし、廉に非ずんば以て徳を養ふなし、

とある如く、實際清廉と云ひ潔白と云ふも、慾すくなくして儉に處らなければ不可能である、一體人間本具の靈

赤裸々たる本性

慾塵中の蛆蟲

性を赤裸々にして見れば、皆無垢清淨の靈體である、清潔白の素質である、内外玲瓏たる明珠である、然るに名譽、財産、生命、情慾等の諸慾の襪縷に包まれて遂に<sup>ア</sup>可惜乎<sup>ラ</sup>本質を現はさず生涯區々として五慾六塵裡の蛆蟲となつて終つて仕舞ふのである、然し社會の一員として此世の中に生きて居るには絶對的に無慾主義を取るとふわけにはゆかぬ、されど此慾てふもの或る程度までは可なりとするも、若し其度を忘れて放縱にせんか、其慾の向ふ所實に底止なきに至る、名譽も慾しい、財産も慾しい、生命も慾しい、木綿の衣服よりは絹衣が着たい、鰻飯より西洋料理が喰たい、内のよりは向の娘が愛らしい、向の娘よりは新橋の藝妓がよいと云ふやうに其の慾

煩惱の賊

山中の賊  
心中の賊

望を發展させたなら盡期際限なしだ、所が社會は自己一人の舞臺でないで、自分の慾望を思ふまゝに獨占するわけにはゆかぬ、まゝにならぬは此の世の慣ひで、到底十に一も自己の希望通り自らの計畫通りには筈では來ない、而して其が裏面には嫉妬、憎惡、怨恨、陰險、邪惡、奸譎、詐僞、驕奢、淫逸、等所有る惡徳が潜在して吾身を苦しめて居る、是に於てか佛陀が

諸の煩惱の賊、常に窺つて人を殺すこと、冤家よりも甚だし、(佛遺教經)

と教誡して置かれた、王陽明は

山中の賊は破り易く  
心中の賊は破り難し

多欲と少欲

と云ふて居るが、皆これ吾人の多慾を制したる訓誡である、又佛陀は多欲は苦惱多く、少欲は諸の功德あることを教訓して、

當に知るべし、多欲の人は利を求むること多し、故に苦惱も亦多し、少欲の人は求ることなく欲することなきが故に此患なし、直ちに少欲すら尙ほ修習すべし、何に況んや少欲のよく諸の功德を生ずるをや、少欲の人は、則ち諂曲して以て人の意を求むることなし、また諸根の爲めに牽かれず、少欲を行ずるものは、心則ち坦然として憂畏する所なし、事に觸れて餘りあり、常に足らざることなし、(佛遺教經)

と、これ多欲は苦勞煩悶の絶ゆることなく、少欲は心常



に坦然として安靜である、で宜しく少欲を修習せよとの訓誡である、コハクドく予輩の説明を要するまでもなからう、毎日の新聞雜報を見れば、眞に佛陀の此訓誡の通りであらう、見よ慾の爲めに生命を屠するもの、財産多き爲め夜の目も安らく合はされぬと苦んで居るものもあらう、否、甚だしきは金故に強盜竊盜に遭ひ剩さへ生命までも取らるゝもの皆これ多慾の賜ものならざるはない、凡て天下國家の治亂興廢も歸するところ此欲の程度如何にあらざるはない、で梅尾の明惠上人が北條泰時の爲めに治國の要を教へて

良○醫○は○よ○く○脈○を○取○つ○て○其○病○の○根○源○を○知○り○て○藥○を○與○へ○、  
 灸○を○加○ゆ○れ○ば○病○お○の○づ○か○ら○い○ゆる○や○う○に○、○國○の○亂○る○、

源○を○知○り○て○、○お○さ○め○給○ふ○べ○し○、○亂○世○の○根○元○は○唯○だ○欲○を○  
 本○と○す○、○欲○心○變○じ○て○、○一○切○萬○般○の○禍○と○な○る○な○り○、○泰○時○  
 曰○く○、○我○れ○常○に○之○を○思○ふ○い○へ○ど○も○、○諸○人○無○欲○に○な○ら○  
 ん○事○難○き○な○り○い○へ○り○、○上○人○の○曰○く○、○大○守○一○人○無○欲○に○  
 な○ら○ん○こ○と○を○思○ひ○給○は○ば○そ○れ○に○耻○ぢ○て○萬○人○自○然○に○欲○心○  
 う○す○く○成○る○べ○し○、○人○の○欲○深○く○訴○へ○來○ら○ば○、○い○ま○だ○我○欲○  
 の○す○な○ほ○な○ら○ぬ○ゆ○ゑ○と○、○我○を○耻○ぢ○し○め○玉○ふ○べ○し○、○其○身○  
 正○し○く○し○て○、○か○げ○の○ま○が○ら○ざ○る○が○如○し○云○々

と、眞にこれ修身齊家治國平天下の秘訣である、泰時は斯の秘訣を授かり、以て之を實踐躬行して専ら勤儉尙武の美風を宣揚し、以て修身齊家治國平天下の實を擧げたのである、若し其一例を掲ぐるに、泰時父義時の死後、

其遺産を分つに彼等には多く與へて自分は極めて少部分を取つた、時に母の云ふやう汝如何なれば自ら取ること斯の如く薄きやと、泰時曰く、されば某事は幸ひにして親父の跡を相續致したればこれにて充分にて候弟共はこれより新たに身を立つべきものなれば多く分配致し候なりと、此一言に兄弟親族皆悦服せしのみならず臣下に至るまで其徳に感じて北條執權中稀れに見るところの治國昌平を得たと云ふ、かゝる無欲の家庭には必ず儉徳が行はるゝは理の然らしむる所である、彼れ泰時の妻女即ち時頼の母である、松下の禪尼が障子の切ばりをして時頼を訓誡したと云ふ話にあるによりて知らる、要するに鎌倉幕府の隆盛になつた基は頼朝を始め北條氏代々の執權

松下禪尼

現代青年  
の理想所謂の成功  
者の理想

職に至るまで皆寡欲勤儉の實行にあると云ふも過言ではなからうと思ふ、之に反して北條の末期及び足利の末などの滅亡に歸するに至りしは主として先代の遺訓に背きこの寡欲勤儉を度外視し、暴欲奢侈に耽りしによるや事實である、凡そ古今東西の歴史に徴して明かであらう、其國の興るや必ず寡欲勤儉により、其亡ぶるや必ず暴欲奢侈によりて來る、是に於て乎、予の憂ふるところは現代の青年諸子の理想とするところは、たゞ富を作るを以て理想とし巨萬の富を作りたるものを以て成功者の模範とし、たゞ成功者と云へば投機的僥倖的に一獲千金の富を作り、否、殊に甚だしきは不正不義の富を作りたるものをしも一代の成功者として崇拜するやうなる傾向あ

るを、諸子記憶せよ、

奢○修○は○こ○れ○人○間○の○墮○落○、亡○國○の○基○ひ○、暴○欲○貪○婪○な○ら○ざ○  
れ○ば○奢○修○驕○傲○の○實○行○は○で○き○ず○、勤○儉○は○こ○れ○人○格○の○發○展○、  
興○國○の○基○ひ○、  
無○欲○恬○淡○は○勤○儉○力○行○の○德○を○養○ふ○、

咄

天○上○の○月○を○貪○り○看○て○、掌○中○の○珠○を○失○却○す○る○な○か○れ○、

局量寛大

格言

五 局量寛大

海○は○潤○く○し○て○魚○の○躍○る○に○從○ひ○、天○は○空○く○し○て○鳥○の○飛○ぶ○  
に○任○す○、

男子苟くも此雅量なくして可ならんやだ、即ち局量寛

胸中の荆棘  
快活の世界

無門の言

格言

大なれば、たとへ三家村裡にあつても、高風霽月神氣爽  
快である、若し知識卑微であれば、たとへ五都市中に居  
るも心情齷齪たりだ、されば宜しく胸中の棘荆を刈除し  
て、憎愛の關門を打破して自他の往來に便にすべきであ  
る、されば天下第一の快活の世界となる、  
然○り○禪○は○此○の○胸○中○の○荆○棘○を○刈○除○す○る○の○快○刀○、こ○の○憎○愛○  
の○關○門○を○擊○破○す○る○の○鐵○鎚○で○あ○る○、故○に○無○門○云○ふ○  
大○道○無○門○、千○差○有○路○、  
透○得○此○關○、乾○坤○獨○步○、

と、これ元より此局量寛大の徳は敢て禪の專賣特許では  
ない、支那の儒者先生などの言にも  
泰○山○は○土○壤○を○讓○ら○ず○、故○に○能○く○其○大○を○成○す○、河○海○は○細○

流を擇ばず、故に能く其深をなす、(史記)

とあつて苟くも君子たるものは此徳を具へなければならぬと云つてる、又基督も其徒に訓示して、

基督の訓示

汝の敵を愛せよ、

人汝の右の頬を打たば汝左の頬をも向けよ、

と云ふて居る、されば此徳は苟くも偉人たり傑士たり、否、君子人たらんには古今東西を問はず孰れも修養缺くべからざることとする、故に予輩は今これを禪によつて諸子に強ひんとするものではない、しかしながら予輩の思考する所によるに禪は比較的其徳を修養するによりよき便であらうと思ふ、ソハ如何となれば前に言ひたる如く、禪の主張する所の無我の觀念、慈悲の觀念、無慾恬

局量寛大の主養分

私情的偏執なき處

島國的根性

包容主義寛大綜合

日本民族の頭腦

淡等の諸觀念はよく此局量寛大の徳の主養分を占むるものであるからである、此等の諸觀念は到底私情的偏執を以て憎愛取捨あるべき筈なく、取捨憎愛の私情的偏執のなきところ即ち局量寛大を致すところである、故に予輩今修養の便利上よりして禪によつて修したならばよからうと思ふのである、

由來我邦人は局量狭小であつて島國的根性であると或一部のもの、評破するところとなつた、がしかし予の觀るところによるに我同胞は決してしか島國的狭量なる本性ではない、其本來の特性は極めて包容主義を採つたものである、極めて寛大綜合的性を有して居る、即ち予を以て言はしむれば、日本民族の頭腦には其が先天的に開

放包括綜合調和的特質を以て組織せられて居る、ソハ建國以來の思想信界、將物質的文明を見るも、皆是れ外來輸入の其物を我取て能く綜合調和し以て悉く日本的化して仕舞つたではないか、たゞ或時代に於て治國の政策として鎖國籠城主義を取りたるを以て、時に或は不幸にしてかゝる妄評に上るに至つたのである、コハ止むを得ざるの勢である、

今や然らず、世界同一家、四海皆兄弟の開放主義の大舞臺に上つて居るのである、されば諸子些々たる事に神經を病まして徒らに取捨憎愛の私情に驅られ牆壁なき樂園に自ら牆壁を築き、關門なき大道に私に關門を構へ而して跼蹐匍匐せず、私情の牆壁を取り除き、憎愛の關

治國の政  
策鎖國籠  
城

世界同一  
家四海皆  
兄弟

關ヶ原の  
戰爭  
眞田昌幸

徳川秀忠

石川玄蕃

島田兵四  
郎

門を打破して、而して天空海濶魚鳥の飛躍に任かすてぶ局量寛大を期せよ、

今は昔し、彼の天下分け目の戦争、即ち關ヶ原の戦ひの時、古今の軍師として其名も高き眞田昌幸が、西軍に應じて、僅かの兵力を以て信州上田の城を守つて居つた、時に徳川秀忠山道の軍を督し來つて攻めやうとし、先鋒の石川玄蕃がすでに城北冠嶽に陣して居つた、乃で秀忠侍臣の島田兵四郎なるものに命じて軍令を玄蕃に傳へしむ、兵四郎命を奉じて營外に立ち出で遙に冠嶽を望むに黛色遠く見る、で彼れ心に思ふやうコハ此城を迂回せば路甚だ遠く、隨て時を移すことも亦多いであらう、よし此城内を通過せんにはと、馳せて城下に到り馬より下り

城門を叩いて懇ろに乞ふて云ふ、某はこれ東軍の傳令使  
鳥田兵四郎なるもの、今主命を奉じて急を先鋒に傳へん  
とするものである、然る所某愚鈍にして地理を知らぬ、  
たゞ見る所、城を廻るは甚だ迂遠であらふと、若し幸ひ  
にして城内を通過することを御允るしくださらば、何の  
幸ひか之れに加へんやと、是に於て門を守るもの斯る無  
謀なる言動に喫驚し、馳せて城將昌幸に此事を告げた、  
スルと流石は昌幸だ、些の驚ける氣色もなく、從容とし  
て告げて曰ふ、成程敵の傳令使として他の城内を通過し  
たと云ふこと古來まだ其の例を聞かぬ、されど彼れ單騎  
にして來つて我城門を叩き大膽にも斯事を請ふ、其勇武  
實に賞すべきである、で我今彼れに路を貸さぬと云ふた

敵城通過

城の要害  
は池柵に  
あらず

ならばこれ私の怯弱を表白することゝなる、許せ彼れが  
請を、宜しく門扉を開いて彼れを引導せよと、守門のも  
の還りて兵四郎に其意を告ぐ、是に於て兵四郎欣然一鞭  
馬に加へて城中を通過し、傳令を果して歸りて、復た來  
つて路を借らんことを求めた、昌幸愈々感歎して、兵四  
郎を延見し、謂つて云ふ、我れ既に敵人なる貴所をして  
城中を横斷せしめたからには、貴所宜しく要害の存する  
所を見て置き、他日先登の功名を建てよ、されども城の  
要害は池柵にあらずして、一に主將の心に在りと、云ひ  
ながら自ら之を導きて、到る處を縦覽せしめて城門外へ  
送り出した、兵四郎敵ながらも深く昌幸の宏量大度なる  
に感服し、厚く禮謝して復命したてふ美譚がある、兵四

郎の膽勇も歎すべきではあるが、昌幸の局量寛大なるは古今あまり其比を見ないであらう、願くは諸子よ、現代の青年諸子、現在及び將來の日本は言ふまでもない、東洋の一角に偏在せる小日本ではない宜しく世界の大舞臺に上つて大活劇をなすべき日本ではないか、而して現代の青年諸子は斯の膨脹的大日本國の中堅となつて國運を發展せしむる所の重且つ大なる天職を帯びて居るではないか、されば些末なることを互に隱匿し、猜疑し、嫉妬し、而して自ら牆壁を築き、門戸を構へて、蚤の罨丸四つ割的の小量を叩きつぶし、宜しく布袋腹的の宏量となつて、彼此黃白の論量を打破して、恒に彼の奈良の大佛的理想になつて貰ひたい、而して眼空寰宇、氣吞五洲、

ふ見地に立つて欲しいのである、

## 第十一章 赤裸禪

上來は予輩口吧々地に幾多の葛藤を打し來つた、がしかし若し嚴密なる禪、即ち専門的禪の眼から見たならば、無論正真正銘の禪ではない、たゞこれ禪の副産物である、要するに予輩は今此副産物を以て現代青年の意志鍛鍊、精神修養の資料に應用するのである、言ひ換へれば禪の本家郷に到るの道中記案内である、向上第一義に到るの枝折である、然り禪の本領に諦達するの手段である、禪の本領とは何か、畢竟するに裸體的禪即ち是れである、俚諺に裸か物落さすと云ふ、禪のドン底はこの所謂

赤裸禪

裸か物落  
さす

裸か物落さすの當體である、

近頃禪學流行の故か種々禪に關する出版物も澤山ある、中には随分の誤植も發見さるゝのであるが、其の中尤も滑稽なのは禪の字を禪ツンデと云ふ字と間違ひ植つて居ることである、乃で或人は斯様な解釋をした、一體禪と云ふ字と禪と云ふ字は其形象が能く似て居るのみならず禪其ものゝ本質からもよく似て居るやうである、禪の本質たるや、言語や文字や、名譽や、形式やのあらゆる世間の垢膩の衣服をスツカリと脱き捨て、禪ツンデ一貫となつて宇宙の眞理と角力を取るのである、即ち第一義の土俵に上つて眞如の横綱と取り組むのである、であるから禪と禪と誤植するのは偶然の暗合で全く沒交渉でもないぢやある

禪と禪

禪の本質

禪一貫で眞如と角力

禪も無用

まいかと、理窟は岩の頭へもつくつと云ふからそう云へば言はれぬでもない、本來無一物主義の禪には面白い理窟である、併しながら百尺竿頭に進一步して見たならば、禪一貫も要不着である、淨裸々赤灑々寸毫の絲毛をもかけぬ、眞の素バダカが即ち本來の面目坊の立姿である、這箇本來の面目坊が禪一貫もつけては居らぬ、否、一寸の絲毛をかけては居らぬ、そして何時も第一義の土俵の中央に突つ立つて、サー來いと待ち構へて居る、サテコソお相敵仕らんと、これも赤裸々となつて四股を踏んで取り組んで見たれば、コ Hanson 如何に大己と大己と相對するは共に大己にあらず、横綱と横綱と相對しては孰れが勝つか孰れか負くるか凡眼の及ぶ所でない、流石の木

大己と大己と横綱と横綱と横



村行司も團扇を決しかねるであらう、果然々々勝負は決しがたい、否、勝敗優劣の境を超絶して居る、是に至つては顔々相對して中に影像もない、即ち二面裂破の當體である、

然り、我れと眞如とは赤の他人ではない、我れ眞如の一分である、否、眞如即ち我れで、我れ即ち眞如である、是に於て、今まで眞如の横綱と角力を取て居たと思ふたはまだ迷ひであつた、コ、決勝點に至つて見れば曷ぞ知らん、眞如は即ち我れであつたものを、イヤ我れは今まで一人角力を取て居つたのであつた、ア―盗人を捕へて見れば我子であつた、眞如を捕へて見たら我れであつた、一休和尚が戀の病を煩つて

眞如と我  
裂れと二面  
破

一休和尚  
の戀の病

本○來○の○面○目○坊○の○立○す○が○た○

一○目○見○し○よ○り○戀○と○な○り○け○る○

と云つて非常に這の面目坊の立すがたを見初めてより戀ひにこがれて寐てもさめても此面目坊に逢ひたひ見たいと思ひつめて居つたやさき、圖らず向上の一路で出會した、時こそ來れと絶言絶慮我れを忘れてシツカト抱きついて見たればコハンモ如何にボカリ眼がさめたハ、ハ、何んだ今のは夢であつたか馬鹿らしい、

面○目○坊○の○立○て○る○姿○と○思○ひ○し○は○

本○來○我○れ○の○姿○な○り○け○り○

とは一休和尚は詠まなかつたが今予輩和尚に代つてやつたのであるが、和尚の心事は正しく斯ふであつたであら

戀人に出  
會

う、ハ……ア！今まで戀人と思ふたは矢張り我であつた  
かと是に於て生佛不二、心境一如の當體となつたのであ  
る、嗟乎吾人今までは我れにある眞如を人欲の私てふ諸  
の垢膩の衣服を纏ふて遂に眞如の本體を隠蔽して置きな  
がら徒らに餘所を探し廻つて居つたのであつた、

長者窮子

他國の塵  
境

佛陀は法華經に長者の窮子と云はれ、道元禪師は  
何ぞ自家の坐床を忘却して猥りに他國の塵境に去來せ  
ん、

と、呵責せられた、自分の物を自分で隠して置ながら其  
れを忘れて猥に餘所の塵埃溜の中まで探し廻てるタワケ  
ものであるは實に慙笑すべきではないか、思へば慚愧の  
至りであると、自ら回光返照して速かに垢膩の衣服を脱

ぎ棄て、淨裸々赤灑々たる本來無一物の面目坊となる、  
是れ參禪の本領である、

悟道詩

悟道の詩に

盡日尋春不見春、 芒鞋踏遍隴頭雲、  
歸來笑撚梅花嗅、 春在杖頭已十分、

と、冀くは青年諸子よ、徒に予輩の語脈裏に轉却せられ  
ず、這箇の裸體禪に諦達せよ、彼は魚兔を得るの筈蹄で  
ある、彼岸に到るの船筏である、一言以て歸結とする、

我見多智漢、終日用心神、歧路逞嘸嘸、  
 欺慢一切人、唯作地獄滓、不修正直因、  
 忽然無常至、定知亂紛紛、(寒山)  
 寄語諸仁者、復以何爲懷、達道見自性、  
 自性即如來、天真元具足、修證轉差廻、  
 棄本却逐末、祇守一場歎、(寒山)

## 青年活禪 大尾

## 附錄 禪と日本文藝

悟庵述

### 一 禪の日本文明に及ぼせる影響 上

由來日本の文明は其多くは佛教の文明によりて發展し來つたことは史家の定論となつて居る、されば予輩敢て今更喋々を要しないのである、しかしながら予輩の今故らに言はんとするものは敢て通佛教の側にあらずして、禪の日本文明に與へたる影響の大なる點である。

抑も我邦の奈良朝や平安朝時代の文明は無論禪の渡來以前であるから、其の影響を被つては居らぬであらふ。奈良朝の

文明は我邦の元始的佛教、即ち奈良の六宗によりて發展した文明であるが、平安朝のは天台眞言二宗の文明であつて、即ち傳教、弘法の齎し來つた新佛教の文明である。爾來鎌倉開府に至るまでの文明はそれなのであつた。而して鎌倉開府となつて武家が天下の政權を執るに至つて禪宗が勃興してからは、日本の文明に一大變動を來したのである。それより日本の文明は殆んど全く禪的文明となつて來つたのである、殊に足利時代戰國時代に至つてはその文學の如きは殆んど五山禪僧の專有物たるの觀を爲すに至つたのである。であるから徳川幕府の初期に於て大に文學の復興を見るに至つたのは、これ決して偶然突發せしものではない、其素地たるや、遠くは鎌倉以來の禪の文明、少くとも戰國時代の禪僧によつて扶植さ

れたるもの、萌芽に外ならないのである、これ決して我田引水的誇言ではない、掩ふべからざる史實である。

## 二 禪の日本文明に及ぼせる影響 下

宋學即ち朱子學を我邦に輸入し來つたものは禪僧である、而して始めて其を我邦に開講したのも亦禪僧である。即ち彼等禪僧は當時鎌倉幕府の歸依崇敬を得て我邦に歸化したる道隆禪師や祖元禪師や、將た寧一山禪師等を始として、苟くも彼より來るものは皆多少の文字を齎し來つたのであらふと思はる。であるからそれより北條足利を経て徳川時代に至るまでの文學は殆んど全く禪僧の掌裡に歸して居つたのである、しかし中には玄惠などと云ふ天台僧もあつたが、其大部

分は皆禪僧であつた。殊に足利より戰國時代にあつては日本の文學は皆五山の禪僧が把持して居つたのである、今其重なるもの、二三を擧ぐれば、次の數師である、曰く玄惠、曰く虎關、曰く岐陽、惟肖、桂菴、南浦等である。此中玄惠一人は天台僧であるが、餘は皆禪僧である。しかも其の多くは皆五山の禪僧である。中に就いて老莊學を傳播したものは惟肖得巖である。又惟肖は我邦に始て東坡の詩を講じたとも云つてある、彼は詩文に長じて頗る後學の範となつたのである。將軍足利義持の歸依する所となり聘されて相國寺の西堂に居り、非常の優遇を得たる碩學であつた。著はす所、莊子口義を講じて同抄十卷を作つたとある。其他に語録や疏稿も澤山ある、中に就いて東海瓊華集てふものなどは實に後學の文範

となつて居る。次に桂菴玄樹の如きは實に我邦に朱子新註の開板をなした嚆矢であつて、我邦儒學史上に於て忘るべからざる功績者である。桂菴は周防山口の人で名は玄樹、字は桂菴、應永三十四年に生る、幼にして京師に入り、南禪寺の雙桂院に入つて惟肖得巖に就いて剃度し、長じて景蒲忻和尚に嗣ぎ、得巖について内外の典籍を精究し、後に大隅の正興寺に住し、此處にて縉紳儒生の徒に經學を講じた、時に聽講者無量であつたといふことである。又應仁元年建仁寺の清啓が幕命によりて明國に使せしに、桂菴は第三號船に搭じ、士官として入明し、而して北京に入りて憲宗皇帝に見え、又蘇州杭州の間を歴遊して諸儒の門を敲きて、大に程朱の新義を學び、遂に彼地に留學すること七年、此間専ら經學及び程朱の

理學を攻窮し、皆其蘊奥を極め文明五年に歸朝したのである  
たま／＼京師争亂中であつたで中々寧處することができぬ状  
態であつた、乃で直ちに石見に避けて暫くこゝで讀書講學を  
専らとし、儒教の新義を唱道して居つた、所が桃李言はされ  
ども、花時自ら蹊を爲すで、周防の大内政弘や、肥前の菊池  
重朝や、薩摩の島津忠昌等が皆師の徳學を聞き、殊に程朱の  
新義を珍らしく大に師を歓迎して聽講するに至つた。文明八  
年には菊池氏に招かれ同十年には島津氏に聘されて鹿兒島に  
客遊した、乃で島津氏は桂樹院と云ふを創建して師を請して  
開山第一世とした。

是に於て師は自家専門の禪餘、盛んに宋學を講明し、而し  
て新義を唱道し大に時人の耳目を一新し、或は島津氏の爲に

尙書を講じ、尋で國老伊知地重貞と謀りて始めて大學章句を  
刊行して大に朱子の新註を傳播したのである。これ我邦に於  
ける朱子新註開版の嚆矢である。爾來益々學徒を集めて大學  
章句を授け大に行はるゝに至つた、遂に明應元年に至つて改  
版することとなつた。桂菴は其後半生の三十年間と云ふもの  
は、常に薩州公の封境内を出でず専ら其文教を司りたること  
は、實に薩南文教の基礎を開きたるものである。其功績や實  
に鮮少ならずである。否、我邦朱子學の爲め、儒學史上に特  
筆大書すべきであらふ。

かゝるに從來の儒者等は坊主を憎んで袈裟までに及ぼし、  
遂に自家の爲には開教者たる、此等禪僧の功績を没却して却  
て誹譏詭誣に勤むるは、愚と言はんか將た痴と言はんか憐む

べきものである。彼等は佛教を異端邪説など、排斥すれども其自家の文教は皆佛教家の手によつて開拓された大切な事實を掩蔽して居るではないか、否、其多くのものは知らぬかも知らぬ。イヤ知りながらも平生異端視してゐる仇敵視してゐる佛者の御蔭を蒙つたと云ふことは口はいつたるくて口外できぬも知れぬ、されど隠しても隠し切れぬは彼れ藤原惺窩はド一デあらふ、彼れ元は禪僧でしかも五山の一なる相國寺の僧徒ではないか、假令へ非を悔ひて儒に歸したと云ふにもせよ、かくまでに其頭を製造せしめたものは誰あらふ、五山禪僧の教恩に浴したからではないか、其から彼の山崎闇齋はどうであつたか、彼も矢張り初は妙心寺の僧で絶藏主と呼ばれて僧堂の粥を喫つたものであつて、其根本の培養は矢張り禪園に

あつて多大の肥料に與つたのである。其から彼南學の祖たる谷時中はドーかと云ふに彼初は高知の眞常寺天堂に就いて剃染し慈冲と號せしも、其學問は矢張り禪僧の系統を承けたものと思はれるのである。

前陳の如く、當時の學者は皆一度は入寺して禪僧に就いて修學したところがわかる、其は鎌倉時代から徳川の初期に至るまでの禪僧なるものは、殆んど佛者であつて其實際の仕事は儒者のすることを兼務して居つた状態である、否、儒者と云はず、殆ど全く日本の文學を司ごつて居つたのである。宛然日本の外交官たる有様であつた、であるから足利から徳川の初期に於ける、支那、朝鮮等の交際文通等から其他一切外交文等に至るまで皆五山の禪僧の手になつてゐることは彼の五

山文學によつて見るも、白なる事實である。故に苟くも日本人にして文學の方面で彼支那朝鮮等の文士學者の間に立つて能く其思想の交通となく、知識の交換をなすものは、禪僧をおいて他になかつたのである。故に當時の禪僧は詩も作る、文も作る、書も書く、畫も描くと云ふやうに、禪餘でなくて却つて其方面が専門のやうな状態であつた。かゝる状態であつたから其中には専門的に儒學の方に興味をもつと云ふやうなるものも輩出して遂に寺院生活が面白くないと云ふて飛出す。して儒學を専門にやつたので、即ち徳川初期の學者であつた藤原惺窩や、山崎闇齋なぞ上に揚げたやうな人たちが出来たのであつた。

次にモ一つ我邦の文學史上に吾々が忘るべからざる恩恵を

禪僧から蒙つてゐることがある。それは如何と云ふに、文の上のことである、即ち漢文の讀方である、彼の漢文に返り點をつけて日本人に讀み易からしめるやうにしたものは誰れであるかと云ふに、これは岐陽と云ふ禪僧である。岐陽は將軍義持の歸依を得て、南禪、天龍、東福等の諸大名藍に住して、禪餘専ら經學の講義をして居つた、其著述の如きは實に儒學界を裨補したることは鮮少でない、彼不遺稿や琴川録などは文章流麗、思操豊富であつて、實に後進の模範となすに足るものである。乃ち岐陽以爲らく、我邦の文學を盛ならしむるには如何しても儒佛の二教を傳播するに如かぬ、そしてそれと普及するには原文のまゝでは六ヶしいから逆も邦人には讀めぬ、で邦人に讀み易からしむる方法を講じなければなら



ぬと、多年工夫研鑽して遂に反り點といふものを附たのである。これ我邦に於ける一番最初の訓點法なのである。次に桂菴がそれに修正を加えて、なほ又南浦が修正を加へて漸く大成するに至つたのである。それより追々進歩して遂に一の句法といふものとなつたのである。かく禪僧等が種々の工夫を凝らして我邦人に讀書力を授けたのである、それよりして徳川の初期に出で、傳つたのが彼の藤原惺窩である。それを繼承したのが弟子の林羅山即ち道春なのである。即ち後世四書や五經に道春點と稱して流布されてるのはそれである。後に至つて後藤點だの、一齋點だのとそれ／＼一家の點を附るやうになつて來たが、其根元は矢張り歧陽が始て教へたのである。それから後世になつて假名交り文となつたもつまりは其

の讀み上げと云ふ、彼反り點から出て來たのであらふ。即ち最初の讀み上げの後の讀み下げとなつたのであらふ。これが即ち今日の假名交り文なのである。これも亦禪僧の賜ものであると云つても敢て誇言ではなからふと思ふ。其他禪僧が日本文學傳播の上に如何に力を盡したか、苟くも彼五山文學の一斑を閲するものは知るであらふ。實に禪僧の日本文學上に貢献せし功績は決して鮮少なからずである。これ公平なる史眼を有したならば、鎌倉足利より徳川初期に至るまでの日本禪僧の文學史上の功績は決して没すべからざるものであると信するのである。しかし遺憾なるは斯くも自から生育せし其文學が後世に至つては却つて敵となつて排佛毀釋の聲を發するやうになり、加之ならず、數々誣告冤罪を蒙るやうになつ

たは、哩語に所謂る畜犬に手を咬まれるてふのであらふ。これれしかしながら獨り畜犬の罪過のみではない、彼等は内に自己を悔り、外には他を輕んじて、幕府てふ天幕を頼みに奢侈逸樂に耽つて居つたから遂にかゝる慘狀を見るに至つたのでいはゞ自業自得である。さればこは後世の兒孫の罪科であつて其を以て決して先人が貢献せし功績は敢て埋没せし譯ではない、世の學者たるもの坊主を憎んで袈裟に及ぼすの偏情に陥るなからんを望む。

次に我邦に於て初めて朱子の理學を論じ、孔孟仁義の道性命死生の理を論じたるものも、亦禪僧圓月を以て權輿となす即ち彼元弘の末の著になりたる中正子がそれである。

圓月は鎌倉の人で、中嚴と號し、入元して古林茂に保寧に

見え斯道の造詣に深く、歸朝して相摸の萬壽、豊前の萬壽、京都の萬壽に歷住し、後康安二年詔を奉じて、建仁、建長、等持の諸大刹を歴董し、東海一瀛集を著はす等、我邦の文學上に貢献せしこと實に大なるものがある祖席の英俊であつた。孔孟朱子の學を倫理的に哲學的に論じたる嚆矢たるを忘れてはならぬ。次に禪の影響が我邦の文學上即ち詩的思想の上に一變動を與へたことである。禪の世界觀、禪の人生觀は詩によつて詠ぜらるゝのである。今其が一端を叙述するならば次の如くである。

### 三 禪と詩

借問す禪の世界觀は何ぞと、予は將にこれ汎神論的である

と對へんとするものである、であるから禪はよく自然を美化して、森羅万象悉くこれ法身の露現なりと觀するのである、彼の颯々たる松風も說法度生の聲と聞き、潺々たる谿水も般若を談ずるの音と聞き、將た青々たる山色も毘盧の法身と觀るのである、彼の東坡が、

溪聲便是廣長舌、山色無非清淨身、

夜來八萬四千偈、他日如何舉似人、

と吟じたのも這箇の當體である、乃ちこれ松竹櫻當位即妙である、であるから風の樹を拂ふて天籟を生ずるも無韻の妙曲である、水の石に激して飛湍の鳴咽するも亦これ無情の吟聲である、況んや彼の花に啼く鳥、古池に飛び込む蛙の音も、いづれかこれ詩ならざるはなく、否、禪ならざるはないのである

る、禪界の老詩伯寧馨師が頃日詩禪一味を公にせられたから詩禪の奧義に參せんとする居士はよろしく該書について參せらるゝがよい、予は今其の管見の一部を略叙するのみである、彼長孺の白雲詩集の序に次の如くいふて居る、

詩有參、禪亦有參、禪有悟、詩亦有悟と、

また云く、

詩禪從三昧出、不可思議、拈華微笑、夢艸清吟、曷嘗有哉と、

又子昂も云ふて居る、

夫詩不離禪、禪不離詩、二者廓通、而無闕則、其所得異於世俗、

と、全體禪を修するものは、自己と自然と同化し、宇宙と我

と冥合するてふ見地に立つて、胸裡に無邊の風月を蓄へ、心中に不盡の乾坤を藏して、而して生死自在の真境に遊戯三昧底に入るのである、であるから一旦山水幽勝の處に逢着せんか、直にこれ無韻の玄唱となるのである、永平初祖が山水に對する玄唱に云ふてある、

而今の山水は、古佛の道現成なり、ともに法位に住して究竟の功德を成せり、空劫以前の消息なるが故に而今の活計なり、朕兆未萌の自己なるが故に、現成の透脱なり、

と、又大智が富士山を詠じて

巍然獨露白雲間、雪氣誰人不覺寒、  
八面都無向背處、從空突出與人看、

と、之をして彼の石川丈山が詠じたる有名なる詩と稱する、

白扇倒懸東海天と云ふに比せんか、其詞想の雄大にして崇高なる同日の論ではない、これ彼れは文詞を以て形容したるに止りて何の趣味も妙韻もなく、此は禪の立脚地に在つて彼れ秀靈の山を詠じたるものにして、即ち萬象之中獨露身の見地を詠出したるものである、故に彼の秀靈なる芙蓉峯としてますます靈ならしむるのである、これ實に自ら宇宙の實在に契當し、天地萬物一體の境に遊戯底の達人でなければ到底不能事である、若し夫れ這般の真境に遊戯底の達人たるならば鑊湯爐炭吹教滅劍樹刀山喝便摧底の活三昧に入ることが出来るのである、彼の雪村友梅禪師の如き元朝の嫌疑を蒙り、遂に支那雪川の獄に囚はれ、湯火條治辛苦想像の及ぶ所でない實に水火の責めに逢ふも泰然自若として、胸中の閑日月を吟

じた、其詩に

百城烟水一枝筇、觸目無非是幻空。  
童子曾參無厭足、鑊湯爐炭起清風。

と、何ぞそれ其思想の雄大であり、そして其格調の崇高なる禪的詩人でなくして誰かあらず、かゝる類例は禪者には往々あるのであるが煩を避けて今は省く、  
若し禪者が自然を樂み、天地と冥合せしところの金聲を聞んか、

幾悦山居最寂寞、因斯常讀法華經、  
專精樹下何憚愛、月色可看雨可聽、  
春松秋菊順時節、蓋地蓋天現鏡空、  
竹影掃除塵轉積、月穿潭水各融通、

峯の聲溪の響きもみなながら、

我釋迦牟尼の聲と姿と、

春は花夏ほととぎす秋は月、

冬雪消えて冷しかりけり、

吉野山奥に心のすみぬれば、

散る花もなし咲く枝もなし、

と、これ實に自然と同化し、天地と冥合せし美觀の極致である。

斯の如く、雄渾偉大なる理想と、清高雅致なる神韻とは、到底禪宗渡來以前の軟文學には聞くことが出来なかつたのである、隨て鎌倉以前にはかゝる雄健莊重なる深遠幽妙なる有聲の畫がなかつたから、其が無聲の詩や、鮮巧美麗なる色彩

畫のみであつたのである、鎌倉禪物興以來は這箇雄健莊重なる、深遠幽妙なる有聲の畫と、そして斯無聲の詩とか物興したのである、であるから遂に我邦が繪畫史の上に一新期を劃した、否、我邦の文學史上に一大變動を來した、即ち前には爛熳たる櫻花の如き軟文學であつたが、後には雄健莊重なる氷骨凌々たる梅花の如き文學となつたのである、これ後に五山文學によつてますます發揮されてゐる、彼の横川百首や、岷峨集などは眞に詩禪一味の玄曲である、若し大智の偈頌に至つては實に其の白眉と云ふも過賞ではなからう、しかしながら這箇はこれ、實は和漢折衷的、否、支那的であつて、純日本的でない、ところが茲に又一種の日本の詩が禪機から生れて來た、其れは彼の俳諧である、そは後日に於て叙述する

#### 四 禪 と 美 術

##### 上 鎌倉以前の美術

日本文明は其精神的方面に於て佛教の爲に開拓されたのみでなく、其物質的方面に於ても亦多大なる關係影響を及ぼしてゐるのである。さればこれまた精神的方面の順序に伴ひ、自ら二區分せらるゝのである。即ち鎌倉以前と其以後とである。しかしながら若しこれを細分すれば日本の美術には自ら三分の區域が劃されるのである。それは奈良朝、平安朝、及び鎌倉時代とである。がしかし今は大別して鎌倉の前後を以て區別するの便宜であると思ふ、并は禪との關係が這個問題の主であるからである。

鎌倉以前の美術は遠く佛教渡來の最初からして、鎌倉開府即ち禪宗勃興時代までの間をいふのであつて、其詳細の點まで研究、否、開陳するにはなかく、容易の業ではない。それは美術専門家の業に譲るとして、今はたゞ禪宗に關係した丈の點に重きを置いて述ぶるのである。それもほんの大略にして置くつもりである。

最初佛教渡來したのは申すまでもない、我欽明天皇の十三年十月百濟から佛像及び經卷を献してからである。爾來數度に渡つて精神的方面に、物質的方面に、印度支那及び朝鮮の文明が傳つたのである。隨て美術工藝の如きも附帶して來たのである。同天皇の十四年に始めて佛像を作り、同十五年に又百濟から五經博士僧九人を貢獻するなどあつて頻りに外

國文明の輸入があつた。其後聖武天皇に至つては非常なる佛教御信仰あらせられたが爲に、彼有名なる金銅盧舍那の大佛像を建造せられたるを初めとして、繪畫彫刻、建築及び鑛山學等の進歩を見るに至つた。爾來上下一般に信仰の念旺盛なるに隨つて、造寺造佛等が日に月に隆盛になつて來たから其の必要上支那三韓から、佛工等が渡來して盛んに佛像を建造すべく努力したのである。崇峻天皇の元年に至つて寺塔建築術の須要からして、百濟より寺工、鑪工、瓦博士、畫工等が渡來して益々工藝美術の發展を企圖するに至つた、又寺塔の柱、又は内部の裝飾等の必要から種々の彫刻細工や壁畫等が進歩するやうになつた。乃で諸國に繪師と云ふものを置かれた、これを國の繪師と云ふて畿内各國に置かれて専ら造佛の

事を司らしめたのである。

次に高尚なる經文を講ずるに當つて、其難解の所には挿繪をして解了し易からしむることが流行したのである。推古天皇の十二年に聖德太子が黄文畫師、山背畫師と云ふものを定められたのも是等の必要から定めたまふたのである。斯くして益々繪畫を奨励し、彫刻等を進歩せしめて、例の壁畫の如きに至つては彼の法隆寺金堂内面のなどは後世に至つても斯道研究の標本とまでして名畫たるを出すに至つたのである。この壁畫は鳥佛師だと云ふ説に曇徴だと云ふ説もあるが孰れにしても日本美術上に於ける非常の珍品である。其他金堂の藥師佛、日月光の二菩薩の佛像の如きは皆稀代の珍品である。又推古天皇の御厨子即ち玉蟲厨子などは推古式建築の標本と

して國寶となつてゐる程である。又元興寺の金銅及び繡箔丈六の佛像を造立し、かくして朝廷に於ては造寺鑄鑄、彫刻、繪畫、繡箔等の工藝美術の發展を企圖します／＼技術の進歩を奨励して遂に名匠良工を優遇し、彼鳥佛師を大仁位に昇せ。同十二年九月に勅して畫師の戸税を免除して、工藝美術の進歩を奨励された、であるから奈良朝は實に本朝美術の淵藪として今日まで推重されてゐるのである。

平安朝になつてからは奈良朝のとは少しく趣が異つて來たのである、其れは彼の傳教、弘法が支那から齎らし來つた直輸入の文明である、即ち天台眞言の教義に準じて、自ら奈良朝のとは徑庭を見るに至つたのである。眞言に於ては三世諸佛の影像を祭り、或は金胎兩部の曼荼羅を壁上に掲げて拜す



ることが非常に行はれた。しかしながら奈良朝の佛像と平安朝の佛像佛畫とは自ら其印象を異にしてゐる。奈良朝の佛像は皆高僧の感得によつて其理想的佛像を描いたが、平安朝になると多くは眞言の秘密儀軌によりて描いたものであるから、自から前代とは異つてゐる、殊に眞言にあつては、彼佛名經によつて非常にこの印象を八ケましく言つてゐるのである。であるから其佛像の相貌が自ら奈良朝式と平安朝式との相違點があるやうになつたのである。否、獨り佛像ばかりではない、其佛教によつて寺塔の建築から内部の裝飾壁畫等に至るまで多少の差異を見るやうになつた。而して前朝には畫工と佛工とが各々分業のやうになつて居つたものも、平安朝に至つてからは其分がなかつたやうに思はるゝ。空海が歸朝して、京

都西寺の附屬に綜藝七種智院と云ふ工藝美術學校を設けて僧侶に教授したのであるから、當時の僧侶は皆自ら繪も書く、彫刻もやる調理も裁縫も皆やつたのである。そしてこれを以て衆生濟度の方便としたのである。であるから其佛像は皆高僧等の信念から描き、彫刻したのである。乃で其等高僧の信念から造り出されたる佛像佛畫であるから自ら大利益大靈驗があるを尊信されたのである。であるから今日でも彼れ行基菩薩とか、弘法大師とか、傳教大師とか、將は惠心僧都とかの御作だと云ふて非常に靈驗あるとして尊信されてゐるも道理である。亦繪畫なども、彼の惠心や、珍賢や、珍海、良秀學融などの描きたるものは今にも澤山あるが、皆時代の名匠であつたのである。既に世が末になるに随つてまた分業が出

來て了つたやうなわけで、遂に營業的になつて、佛師屋あり、佛畫屋があり、法衣屋があるやうになつたから信者の方でも其等の造つた佛像や影像に向つては、彼高僧等の作佛に對する程の敬虔なる尊信の心を拂はぬやうになつて自から信念も薄らくやうになつて來たのである。これは止むを得ざる人情の趨ふ所である。されど朝廷には非常の信佛であらせられたで、清和天皇の如きは二萬八千幅の佛畫を造らせて諸國の國師の朝に掛けさせると云ふが如く非常なる勢であつた。で佛者の中にも一刀三禮の佛像を彫刻するものがあり、藕絲を以て曼荼羅を繡縫するものも出來ると云ふやうになかく盛んであつた、それより進んで平安朝の末から、鎌倉開府の初期にかけては、惠心を始として空也、法然等が出で、阿彌陀經

本位の念佛宗を開いて、大に平民的通俗的の法門を鼓吹したのである、随つて佛像佛畫、否、繪畫美術上に變動を表すに至つたのである。此時代には佛教宣布の方便として繪傳と云ふものを造られた。又懲戒的に造られたものは地獄變相の圖を造られた、之に反して天堂の極樂圖も造られた、それは愚夫愚婦に向つて高尚なる教理を説くよりも、直接眼に映する卑近のものをもつて勸善懲惡せしめたのである。しかしかゝる幼稚なるものにては當時の社會にあつては其利生安民の化益を施したることが決して少くはない、其社會に及ぼせる感化力は實に多大なるものであつた。かくして愈々鎌倉開府となりて世は武士の專有となつて社會が一變すると同時に文學美術の上にも一大變動を來したことは時勢の趨向であつてこ

れは免るべからざる數である。

#### 下 鎌倉以後の美術

予は今鎌倉以前の美術を其以後のに對して輕美と云ふ、輕美術に對して其以後のは硬美術と云ふ。而して輕美術を愛好するものは、其弊害や遂に奢侈華麗に耽り、優美文弱に流れ、淫樂に沈淪し易い、例へば彼平安朝縉紳の倒れたのなどは皆此の弊毒に中つたのである。即ち奢る平家久しからずで、遂に彼れ木強粗野なる源氏の爲に倒されたるのは、これ適切なる證明である。即ち當時の武士は、否、源氏は實に質實簡樸なると、尙武廉潔とを以て主義としたる武士であつたのである。であるから此時此際、彼京都佛教、即ち奈良朝、平安朝式煩瑣たる舊佛教は既に業に彼れ武士には嫌厭せられたの

である。乃でドーしても彼等には之に反したる簡潔素朴なる安心法が欲求されて來たのである。恰も好し當時その簡樸を旨とせる念佛の法門は彼の淨土門から鼓吹されつゝあつた、しかし、彼法門はあまりに婦女的であつた爲に、彼機鋒鋭敏なる赴々たる武夫の信念を把住するには足りなかつたと見え、で此に是非彼等武夫をして適切なる精神的食餌を求めしむるに至つた、然りこの精神的食餌に飢えつゝある武夫の欲求に投ずるには、武人的活宗教が最大必要である。たゞ、内には榮西、道元の二高僧が入宋して臨濟曹洞の二宗を傳へて來、外からは道隆、祖元、寧一山等の禪僧が續々支那から渡來歸化して、鎌倉に道場を開いて大に禪風を舉揚して、鎌倉武士の飢渴に類しつゝある精神を醫したのである。

然り、此宗は能く武人の精神要求を充たすに適切なる主義であつた、であるから一度び彼日本海上を席卷し來たる禪風には、草に風の加ふる如く、殆んど關東の山河を風靡するの勢であつた。史家或は云ふ、鎌倉幕府が彼より禪宗を聘して、頻りに禪を鼓吹したのは、彼京都に對する態度からして、一時の政策に出でたものであると。これ勿論社會政策とか政治的策略とか云ふ方から觀察を下したならば夫れ或は然らんだされど大體から當時の佛教狀態人心の變移、生存の欲求から概觀するならば、唯だ單純に當時の幕府が一時的社會政策上から禪を應用したと云ふばかりではあるまい、其れにはモソツト深い／＼あるものがあるであらふ。

一體禪の主張するところは、予の言ふまでもない、人生一大

事たる生死の關門を透脱して、須らく活潑々地に住するのである、即ち直指人心見性成佛であつて、不立文字教外別傳が此宗の主腦とするのである。であるから従前の教者論者の理窟邊や言詮の網に罹らぬ。簡易直截、機鋒銳敏、質素儉約を旨とする、これ頗る當時武人の欲求に適合してゐるのである。彼の鎌倉武士の典型と稱された、北條時頼や、及び時宗の如きは、皆禪門に參じて、彼の如き殺活自在に而も克く活潑々地に住して、國政を行ひ、外侮を禦ぎ武威をして海外に振ひ、彼れ四百餘州を震撼せしめたのである。乃ち我邦武士道中、最も活ける働きをなしたるは鎌倉武士である、其武士に感化を與へたるは禪であつた、世の武士道を論ずるものは武士道の培養には儒教が大に與つて力あると云ふも、是れは足利以

後、多くは徳川時代の話であつて、所謂武士の典型たる鎌倉時代の武士道は到底禪の感化は免れぬ、否、全然禪の感化であつたと言ふも敢て過言ではない。禪と武士道の関係は、拙著「禪と武士道」を見て貰ひたい。

かゝる禪風の鼓吹に伴ふて、其影響する所も亦多大なるものであつた。其が風俗人情は勿論のこと、文學、美術、工藝に至るまで、殆んど禪的ならざるはない程であつた。換言すれば、前代までは、多くは軟文學軟美術であつたが、當代に至つては硬文學硬美術となつて來たのである。

即ち奈良朝平安朝時代の美術は、主として貴族的であつたやうに思はるゝ、例せば彼の繪畫の如きは多くは五彩燦爛として鮮麗なる寫眞的のものが歓迎せられた。即ち佛像や菩薩

の影像や、若しくは高僧貴人の肖像とか、或は繪卷物であつたのが、鎌倉以後に來つてからは、禪宗勃興以後は前代に反して、平民的と云ふやうな風になつて來たのである。即ち彼れ艶麗なる五彩の繪畫は代謝の傾きとなつて、却つて瀟洒淡々たる水墨の畫を稱美するやうな風になつて來たのである。此疎洒淡泊なる水墨畫はその氣品がドコとはなく高尚で、そして其氣骨が中々稜々たるものがあつて、一種言ふべからざる崇高幽玄の眞趣が含まれて居るのである。であるから彼の濃厚鮮麗なる色彩畫を凌駕するの勢となつたのである。言ひ換れば、前代の繪畫は貴族的、公卿的、華奢的であつた、當代のはそれに反して、平民的、武士的、疎樸的であるから、自ら武人隆盛の當代に賞翫せられたるは當然である。であるか

ら、其の嗜好趣味が大に異つて来たから、其が書題も自ら異つて来たのである。前者は多く高僧貴人、若しくは佛菩薩の影像が書題になつたのであるが、後には多く理想的の人物とか、又は山水花卉等を氣骨稜々たる筆を以て描いたのである、であるから随つて氣韻高尚にして趣味を深からしめたのである。此と共に他工藝、即ち彫刻、建築、及び室内の裝飾も皆禪的となつたのである。遂に日常の坐作進退の諸禮式にまで及ぼしたのである。是に由つて之を觀れば、禪の我邦文學美術工藝の上に、將た人情風俗の上に一大變動、否、一段の進歩を來したのは、實に忘るべからざる効果であるを謂ふべきであらふ。

乃ち禪宗が鎌倉幕府の外護によつて、我邦に傳播されてか

ら、大體に於て美術家、中に就て繪畫の上に一大進歩を來したることは前述の如くであるが、其が顯著なる進歩と云ふは畫其ものが皆詩的となつて來たことである。言ひ換れば、自然美を詩的に描き出すことである。即ち無聲の詩を吟咏することである。前に述べたる如く、以前は多く佛畫か若しくは高貴の人の肖像か、サなくば壁畫ぐらゐのものであつたのである。然るに禪宗勃興以來は、多くは淡墨なる山水畫を描きて自然を詩的に美化することとなつたなどは大なる變動、否、寧ろ進歩したる顯著なるものである。其から此外著るしき變化を來たしたのは、彼の畫家彫刻師などの名前が皆支那的となつた、即ち禪的となつたことである。従前は畫家の名前は皆日本流にして、訓讀であつたのが皆音讀となつたのである。

これ或は雅號であると云ふかも知れぬが、兎も角斯様な趨勢となつて來たのは、全くこれ禪的化したのである。彼等の雅號と稱さるのは禪家の法號によつたものと見ても大過がない。其が遂に普通となつて了つたのである。そして彼等の落款には皆其號を用ゐるやうになつたのが遂に今日に及んだのである、しかし今日の人はかゝる起原のあることを多くは知らぬであらふと思ふ、例せば以前の畫家は巨勢金岡とか、藤岡信實とか、或は行信等の如く皆日本流であつた、ところが以後になつてからは周文とか、如雪とか、或は雪舟とか云ふ風に變つて來たのである、而して後代になつては獨り畫家のみではなく、儒者も醫師も皆剃髮して僧形となり、僧官を授けられたのであつた、今日至るも、世の學者、畫家、醫師な

どが往々にして、自分の號を音讀にしてる者のあるは彼等の先人が皆禪的化したる遺風が存して居るのである。其他風俗上、建築上、將た裝飾上、禮式上まで皆禪的化した了つたのである。其建築上の著しき變化は彼の東山式などと云ふのは全く禪宗から變じて來たのである。現代に於ても大概の家は床の間、玄關など稱するは禪の遺風を存してゐるのである。其他茶の湯、生花、香道、柔道、武士道劍道も皆禪の感化を蒙らざるはない、否、寧ろこれ等は皆禪の産物であると云つても過言ではなからふ。されど斯道専門家にあらざれば其が詳細は子輩の盡すところではない。(完)

無一物中無盡藏  
有花有月有櫻臺

附錄  
禪と日本文藝  
大尾

大正二年十月廿八日印刷  
大正二年十月三十一日發行

(青年活禪附)  
正價五十錢



著者 秋山 悟庵

發行者 奧村 金二郎

印刷者 牛坂 三郎

印刷所 邦文社

東京市京橋區中橋和泉町四番地

藍外堂書店

總發東京壹〇五九六番



31129

### 明治天皇御實記

附 乃木大將實傳

○熊谷發之助謹述●菊判全一冊  
●寫眞版十數葉入●正價廿五錢送料六錢

### 大御心

附 錄

### 朶公遺詠

○藤原狹維謹撰●袖珍美本全一冊●寫眞版入  
●正價廿五錢 送料四錢

長くも先帝陛下今上陛下の御製皇后陛下皇太后陛下の御歌及乃木大將の詩歌を集めたる聖典なり

福本日南先生序 上野靜村先生著  
池邊義象先生著

### 赤穂義士譚

紙數八百餘頁  
正價九十二錢  
送料十錢

義士復讐に關する幾百を以て數ふる妄談虚説を排し始めて實録中の實録を得たるは即ち本書也

叻鹿庵主人著

### 嗚呼古英雄

紙數四百頁  
正價四十八錢  
送料十錢

釋宗演禪師題 字秋山悟庵御著  
井上哲次郎博士序

### 青年活禪

紙數三百七十頁  
正價五十錢  
送料八錢

大町桂月先生 刪修 伊藤天願先生著  
伊藤銀月先生

### 文士寶典

(美文材料集)  
紙數三百八十頁  
正價五十八錢  
送料八錢

石原東國先生著

### 陽明學派の人物

全一冊正價四十錢送料六錢

### 古錢鑑

和全一冊  
正價十二錢  
送料二錢

### 中古貨幣鑑

奉書一枚  
正價二八錢  
送料二錢

### 古刀鑑定要覽

同  
正價十二錢  
送料二錢

終

